

2020年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨見出し

- 2020年1月5日 (二人一人がキリストと直結)
- 2020年1月12日 (聖霊の火の燃ゆる祈りの集会)
- 2020年1月26日 (キリストにおける新しい生活)
- 2020年2月2日 (愛は律法の完全なり)
- 2020年2月9日 (主の十字架の贖いの業)
- 2020年2月16日 (地上界(現象界)と天上界(根源界))
- 2020年2月23日 (神讚美以外にない)
- 2020年3月1日 (廓然無聖)
- 2020年3月8日 (十字架道を実践)
- 2020年3月15日 (我が救い主はキリスト)
- 2020年3月22日 (互いに忍び赦し合う)
- 2020年3月29日 (新型コロナウイルスという見えない敵)
- 2020年4月5日 (3密を避けるよう行動変容)
- 2020年4月26日 (3密を避けるため4月12日以降休会)
- 2020年5月3日 (主キリストから賜わった新生命)
- 2020年5月9日 (キリスト直結、一人一召団)
- 2020年5月17日 (新型コロナウイルスからの解放と正常な日常生活への復帰)
- 2020年5月30日 京都キリスト召団集会再開のお知らせ
- 2020年5月31日 「十字架と聖霊」——福音(キリスト道)の原点
- 2020年6月7日 「神讚美の生涯」——人生の目的は神讚美
- 2020年6月14日 「結果」に依存しない「信」
- 2020年6月28日 「喜び、歓喜」
- 2020年7月5日 「祈りたる事は叶えられたりとせよ」
- 2020年7月12日 「わが賜りし福音」
- 2020年7月19日 「生命の御霊の法」VS(対)「罪と死の法」
- 2020年7月26日 「今日も明日も次の日も我は進み往くべし」
- 2020年8月2日 「人は何によって生きるか？」
- 2020年8月16日 「汝は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」
- 2020年8月30日 「小さき者を顧み給う神」(聖書随想①)
- 2020年9月6日 「まず『神の国』と『神の義』とを！」
- 2020年9月13日 「いつまでも存続するもの」——信仰・希望・愛
- 2020年9月20日 「忍耐の勝利」



2020年9月27日 「御名」

2020年10月4日 「暗きに坐する民は大なる光を見、

死の地と死の蔭とに坐する者に光のぼれり」

2020年10月11日 「御国の福音を宣べつたへ」(マタイ伝4章23節)

2020年10月18日 「恵福なるかな、霊の貧しき者」(マタイ伝5章3節)

2020年10月25日 「恵福なるかな、霊の貧しき者」(マタイ5章3節) (続)

2020年11月1日 「我ら、既に神の子たり」(ヨハネ第一書3章1〜2節)

2020年11月8日 「霊」と「肉」

2020年11月15日 「キリスト・イエスに在る生命と御霊の法」

2020年11月22日 「救いの確かさ」――「十字架」が土台、「聖霊」が確証――

2020年11月22日 「2020年 クリスマス集会 ご案内」

2020年11月29日 「平安汝らに在れ！」

2020年12月6日 「御霊の結ぶ実」

2020年12月13日 「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」

2020年12月20日 「主キリストからの贈り物」――「見えるもの」と「見えないもの」

〔編者註…2020年1月5日から5月17日までの本文には講筵題名が記載されていないため、仮のタイトルを()内に表示した〕



(一人一人がキリストと直結)

2020年1月5日

新年を迎えて、奥田先生は、

「自分は、キリストと人とを繋ぐ媒介者に過ぎない。一人一人がキリストと直結し、その恵みを持ちよる集会となつて欲しい。」

と語られた。主ご自身が、

「この火(聖霊)が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」(ルカ 12・49)

と我々一人一人と霊的な交わりを切望されている。人類が自らの意思で主に心から立ち帰り、神に降参し、永遠に神との交わりの中で幸せに生き、神を讃美し神に栄光を帰するようになるまで、主の御計画は続くに違いない。

「我々の戦いは血肉(人間)を相手にするのではなく、支配と権威、暗闇の世の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのだ。」(エペソ6・12)

「迫害する者を呪わず、むしろ祝福を祈り、悪に対して悪を返さず、全ての人の前で善を行い、悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」(ローマ

書12・14・21)

とパウロは我々に勧めている。主は、誰に対しても、天国に入ることを拒まれない。その者の誤った生き方が天国を息苦しいと感じさせ、自らを暗闇に追いやり、決して安らぐことのない責め苦の状態に置くのだ。天界のキリストの前では、何一つ隠し事は通用しない。全てが明らかにされる為、人は主に降参して赦しを乞うて平安を得るか、降参せず自らを暗闇に追いやって不安にさいなまれて生きるかしかない。

主は、このような暗闇にさまよう人類を救済すべく、罪(利己主義、傲慢、虚偽、貪欲、姦淫、盗み等々)にまみれた地上に受肉され、人類の過去・現在・未来の一切の罪を身に負つて、十字架で我々に代わつて裁きを受けることによって、我々に赦しを与えてくださった。罪なる古き我は主の十字架と共に葬られたのだ。(ガラテヤ2・20)

しかし、存在そのものが罪であった我々は、主の赦しと救いの平安の中で本来の姿を忘れて、自らを神と思い込んだり、滅ぶべきこの世と運命を共にせぬよう、靈魂を目覚めさせる為に、主の十字架の救いにいつも立ち帰るよう、促されるのだ。

我々のどんなマイナスも、主の十字架で片付けられたことを受け取り、

「お前は根源的に罪なき者とされた。大丈夫だ。安心して行け」

との主の励ましを受け取る者は、感謝の思いで、主の

「自分の十字架を負つて、わたしに従いなさい(罪||利己主義から脱却しなさい)」

との厳しい御言葉にも飲んで従うことが可能となる。



(聖霊の火の燃ゆる祈りの集会)

2020年1月12日

奥田先生は、新年集会で、京都召団は、「聖霊の火の燃ゆる祈りの集会」になること、各召団員は、「火を投ぜんとて来り給うたキリスト」のご本願に應えることを今年の目標にすると宣言されました。先生には、ルカ伝12章49節以下にある、

「我は火を地に投ぜんとて来たれり。此の火既に燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり、その成し遂げられるまでは、
思い迫ること如何ばかりぞや。」

との主の叫びを共有したいとお気持ちがありました。

今日の集会は、年頭の決意を実践するにふさわしい、短いながらも内容豊かな講筵と、多くの兄弟姉妹の祈りが捧げられた聖霊の集会となりました。

詩篇127篇は、勤勉に寝る間も惜しんで働いて家を建てても(地位、財産、健康等この世で成功したと思われるものを得ても)、神様によつて建てられ、神様によつて守られないかぎり盤石ではなく、空しいものではないかと疑問を投げかけています。この疑問に対しては、視点を変えて、人間の力に頼ることを止め、まず神の国を求めること(キリストに心を向けること)です。そうすると、キリストが私たちの家を建てて守ってください、その家を神様のために用いられるものとさせていただきます。自分の人生全部をキリストに委ねて、キリストのために捧げてゆくという生き方をしてください。これが私たちへのキリストのご本願です。

詩篇130篇からは、神様の前に立つと、深き淵(人間の罪深さ)が示されます(3節)が、十字架における絶対的な許し(4節)があるので、恵みを素直に受け取ってください、苦勞の多い人生ですが、高い次元の命(聖霊の賜う命)を受け取っているかどうかは人生の重要な分かれ目になる、と話されました。

では、聖霊が何故必要なのでしょう。キリストが私たちに聖霊を与えられるのは、私たちが霊の次元でご自身と同じ姿になり、人に聖霊を分ち与えることを願っておられるからです。聖霊をいただき、キリストのご本願に應えるためには何よりも祈りが大事です。祈りの火が燃えているかどうかは召団に問われているのです。

詩篇は、日々の祈りの助け、迷った時の道標となるものですから、日常生活の中に取り込んで、生活の支えにするように心がけてくださることを願っています。



(キリストにおける新しい生活)

2020年1月26日

「汝らの為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。録して『主いひ給ふ、復讐するは我にあり、我これを報いん』とあり。『もし汝の仇飢ゑなば之に食はせ、渴かば之に飲ませよ、なんぢかくするは熱き火を彼の頭に積むなり』 惡に勝たることなく、善をもて惡に勝て。」(ロマ人への書12章18～21)

「されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。」(山上の垂訓 マタイ5章39、44、45)

ついに、善は惡に勝利し、正は邪に、光は闇に、喜びは悲しみに、希望は絶望に、栄光は恥辱に、そして、生は死に、永遠の輝かしい勝利をおさめるのである。

そして、忍耐強い永遠の愛は、執念深い憎しみの心に、ついに勝利するのである。

今日、奥田先生は、キリストにおける新しい生活とキリスト者の生活規範について講筵されました。

「盗人の残し置きたる窓の月」 良寛

みたま様が満ちている靈止は、他の必要のため、もがかない。いのちもそうである。生きてもよし、死んだら主に会えるのでうれしいと思う。 平安



(愛は律法の完全なり)

2020年2月2日

例年になく暖冬が続き、早くも梅が咲いている。気候変動に関する自然からのシグナルとも思われ、沈黙の叫びに目と耳を澄ませたい。

今日の講筵は詩篇139篇から始まった。奥田先生は、キリストを知らない時代の詩篇の作者が、こんなに親しく信頼をもつて神様に呼び掛け、讃美と感謝と導きを祈っている姿に、あらためて驚くと話された。先生は、詩篇は祈りの書であり、祈りを学ぶためには詩篇を深く読むよう勧められた。

続いて、先生は、本論に入る前に、いつものようにキリストの福音を自由に語られた。主が私たちの負うべき荷を全部背負ってくださっていること、十字架で古いあなた(肉)を既に葬ってくださったこと、新しい霊、生命を私たちに注ぎ込み、この聖霊の力で前を向いて生きる事など。先生は、

「神様の最大の贈り物である十字架の贖いを、幼児の心でそのまま全存在で受け取ることが大事(これが信)」

と力を込めて話された。続いて本題に入り、ロマ書13章8〜10節までの御言葉に集中した。

「愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり」(10節)

とある。先生は、この御言葉に関連する福音書の箇所として、マタイ伝22章34〜40節、マルコ伝12章28〜34節、ルカ伝10章25〜37節を引かれた。いずれも、2つの律法(誠め)として、

(1) 神を全身全霊で愛すべきこと、

(2) 「己の如くその隣を愛せよ」とある。先生は、ヨハネ伝でキリストが、弟子たちに新しき誠めとして、

「汝ら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。」(ヨハネ伝

13・34)

「キリストを愛するとはその御言葉を守ることである」(同14・23)

と言われている箇所も触れられた。結局、律法は、

「自分を愛するように隣人を愛しなさい」

の御言葉に吸収され、

「愛は律法の完全なり」(ロマ書13・10)

の結論に至る。従って私たちは、ガラテヤ書2章20節以下の十字架を体で深く受け取り、キリストの僕に徹し、生活の中でキリストの福音に相应しく日を過ごしているかを考え、主が全責任を引き受けたと言ってくくださった「愛」の御約束に信頼し、主の平安を頂いて進んでいきましょう、と。判断に迷う時、つらい時、詩篇46篇を声に出して読もう。

「神は(キリストは)われらの避所また力なり、
艱めるときに最近き助けなり」



(主の十字架の贖いの業)

2020年2月9日

奥田先生は今回の集会においても、我々の励ましとなる聖書の御言葉をいくつも引用された。先生は、主の十字架の贖いの業を最重要と受け取られている。主は、自力では決して罪と死の法則から自由になれなかつたかつての我々を解放する為に、鋭利な金属片の付いた鞭打ち刑と十字架刑(死刑)という極刑を受け入れることによって、我々の罪に対する代償を義の神に支払ってくださった。そのことによって、我々は本来滅ぶべき罪人であるにも関わらず、主にあつて罪の赦しを神から受けることが可能となつた。主が十字架の贖いの業を成し遂げてくださらなければ、そのことを我々人類が心底感謝して受け取らなければ、人類は自らの罪によつて自滅する他ない。しかし、主は十字架によつて我々の罪に対する贖いの業を完璧に成し遂げられた為、たとえ何万年という単位の途方もない時間がかかろうとも、全ての霊を御元に引き寄せられるに違いない。その主の御計画に対して、我々キリスト者は命を投げ出す覚悟で参与する光栄に与かっている。

奥田先生は、この主の十字架の贖いの業をどうにかして我々に伝え、感謝して受け取る事を切望されている。人間の努力精進は悪いことではない。若い時には、むしろ必要と言える。しかし、自ら(の努力や能力や業績)を人に誇るようになっては、パリサイとなつて他を裁くようになるので、仮に世は賞賛しても、神の国では霊的なことを学び直さなければならぬ。自らの業を誇るなら、その事を成してくださった主を誇るようにと奥田先生は話される。

肉の次元から霊の次元への門となつてくださったキリストの十字架。主は、

「わたしが十字架で、お前の罪・咎・憂いの一切を引き受けた。お前は根源的に罪なき神の子とされた。その事を受け取って欲しい。二度と罪(利己的な生き方)の

霊に心を奪われないで、神の子らしくわたしに倣う者となつて欲しい。わたしの聖霊で満たされて本当の幸せを手にして欲しい」

と我々に促しておられるのではないか。「まだ自分は」と言つて、主の十字架を受け入れられないのであれば、神の御心の前に己を立てている点で、謙虚に見えて実は傲慢なのだと奥田先生は言われる。いつの日か、主の御心が理解され、心底感謝して主の十字架が受け入れられる日が来ることを願わずにはいられない。



(地上界 (現象界) と天上界 (根源界))

2020年2月16日

先週に引き続き、今週もペテロ前書1章を中心にご講筵が持たれました。同章には、ペテロからの私たちに対する深いメッセージが込められていることをしっかりと受け取るようにとのお心から、これを再度取り上げられたものと思いました。

先生は、ペテロ前書等を通して、地上界 (現象界) と天上界 (根源界) という二元の世界が私たちにとっていかなる意味を持っているのかを、深く、情熱的に語られました。

地上界に住む私たちは、それを完結したものと考え、そこでの幸福を求めて日夜努力を重ねます。しかし、地上界は、本質的に有限であることを免れることができません。突然にやってきた東日本大震災のように、絶対安全なものは何一つなく、誰にとつても何時死が訪れるかわからない状態で、常に安泰であることは保証されていないのが現実です。他方で、天上界は、瑞々しい生命の樹のある永遠の世界です。地上界にいる私たちが、この天上界と縁を結ぶためには、受肉して地上界に降りられ、二つの世界を知っておられたキリストに頼らざるを得ません。

「我は道なり、真理なり、生命なり、我によらでは誰にても父の御許に至る者なし」(ヨハネ伝14章6節)

とあるとおりです。キリストは、土から生まれて土に還る運命にある儂い人間に対し、天上界の命を与えたいという神様の本願によって、この地上に来られました。キリストは、私たちを有限な地上の命だけで終わらせたくない、本当の世界を受け取ってほしいと願っておられます。私たちが、キリストの本願に応え、見えない根源界に支えられて地上界があることに目覚め、キリストの望まれるところに身を委ねて生きようになれば、今までとは関心のあり方が違ってきます。

天上界に大きな希望がある以上、何があつても失望落胆することはありません。

「神様が私に与えられたご計画を示して、それに従わせてください。御心になかう生き方をすることが私の願いです。」

との祈りを持つてお任せするだけでよいのです。神様に委ねてゆけば、神様は、私たちに最善をなしてくださいます。そうすれば、つぶやきや疑いは消えて、神様に対する賛美と感謝しかなくなり、イザヤ35章の事態が自然になつてゆきます。そして、今度は、神様は、私たちに對し、

「この世の人を導く者となれ！」

「世の光、地の塩となるように！」(マタイ伝5章14節)

との使命を与えてくださいます。皆さんが、終末の迫りの中で語られている聖書を身読し、キリストの祈りに応えて本当の世界を受け取り、「生命の輝き」の中で歩まれることを望んでやみません。



(神讃美以外にない)

2020年2月23日

梅が満開となりまぶしいくらい。メジロが集まって鳴いており、にぎやかだ。花の蜜を吸いにきているのだろう。

今日、奥田先生は開口一番、次のように言われた。

「私たちが頂いている福音は、神・キリストが全ての事を用意してくださった、それを単純に「有難うございます」と受け取る以外に何かあるのですか、神讃美以外にないではありませんか」

と。聖書朗読の詩篇103篇は、神讃美と感謝にあふれている。

「わが靈魂よ主を讃めまつれ、その聖き御名をほめまつれ、……主は汝がすべての不義をゆるし、すべての疾を癒し、なんじの生命を滅亡より贖いだし、仁慈と憐憫とを汝に冠らせ、なんじの口を嘉物にて飽かしめ給う。」

まことに、感謝、讃美は直き者に適わしい。続いて先生は、

「それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力なり。」(コリント前書1:18)

を引かれた。世間の人は、2000年前の十字架を自分とは関係がないと言い、その深い道理も認めない。しかし十字架の有難さを感謝していただく者には、救いに至らせる神の能力であり、その贖いは神様からの最大のプレゼントである。したがって、十字架がしっかりと立っている処にこそ聖霊が臨み、感謝、讃美があふれ出ることになる。

次に先生は、使徒行伝17章28節を引かれた。パウロはアテネで「知られざる神に」と書かれた祭壇を見つけた。パウロはアテネの人たちに、

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり。」

と告げた。現代の私たちはパウロに習い次のように言いたい。

「私はキリストに贖われ、新しい生命を頂いた者です。聖霊のキリストが私の中に生きておられ、生命付け、天来の力を賜うのです。」

と。最後に先生は、讃美歌136番「血しおしたたる」と、138番「ああ主は誰がため」の歌詞を読まれた。136番はキリストの苦難のご生涯の歌であり、138番はそれに対する私たちの応答の歌である。特に138番の5節、

「いの身をよきとぐる ほかはあらい。」

を深く心にとめた。その他、イザヤ書43章1〜7、同章19〜21も参照。



（廓然無聖） かくねんむしょう

2020年3月1日

天の次元…根源界霊。

主の祈り…山上の垂訓、廓然無聖のイザヤ書11、12、35章、コリント前書13章。

イエス・キリスト様は、天の消息をリアルに語っている。（天の次元で語られている）

天国には、悪人は居ないので、愛は寛容にして慈悲あり、愛敵（敵を愛するので無敵）

天の次元で凡て包んでしまう。

変貌…時空を超えている質のチェンジ。肉で生まれて、霊に甦るイエス・キリスト様が、まこと・いのち・道で在られることを見出す者は、誰でも十字架・復活・聖霊で在らしめられ、霊止に変貌させられます。

地の次元…現象界、肉。「目には目を」は、それ以上のこと（倍返し）はしないように、ということ。変貌しないと、御言葉は暗号なので本来、解読不可能なのです。

みたま無き者は、キリスト者に非ず（ロマ書8章9節）、自壊作用で消化不良に陥り、偽善者と見なされます。

光の来ている間に、光を信受し（ヨハネ伝12章36節）、天界で生きる準備をしない。

天の梯子（エレベーター）から下つて来られたキリスト様にとつては、敵も味方もない、すべての人を神の子として救いたいメシア（救い主）で在られます。 南無キリスト

〔編者註…「廓然無聖」（『エン・クリスト』第12号 1982年12月号 主筆小池辰雄）

「梁の武帝、達磨大師に問ふ、如何なるか是聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝曰く、朕に對する者は誰なるぞ。磨云く、不識。」

廓然無聖、廓然とは廣大無辺なこと。本当の宗教は相対的な区別をしない。であるから無聖はまた無俗をも示唆する。宗教的根源存在は、無私、超観念、無限、万象包摂といったところにその本質がある。イエスも言った、「おまえは何で私を善いなどと言うか。神ひとりの他に善いものはない」と。イエスの根源意識は「無」善に根をおろしていた。イエスのこの「無」に神の「全」がそのまま入って来た。だからキリストは「我を見し者は父を見しなり」とか、「我と父とは一如なり」と道うことができた。それゆえ、肉なるイエスは無者であり、霊なるキリストは無限無量者である。それで私はイエス・キリストを無即無限無量者と呼びまつる。合掌。天韻無鐘〕



(十字架道を実践)

2020年3月8日

新型コロナウイルスが世界規模で猛威を振るっている。現代は災害・疫病の時代と言える。衛生面や食糧・医療が向上している現代でさえ、ウイルスは人類の隙をついて来る。いつの時代も、人類に突きつけられる課題があり、それらを乗り越えることで我々は何かを学び、成長の機会とするのだろうか。

主は災害や疫病といった試練をも我々の霊的な成長と学びの機会としてくださる。主を知り信じる者の強みは、どんなに困難な局面でも現象面に捉われない希望を持てること。一方、主を知ろうとせず信じようとしないうちは、現象面にのみ捉われる。主を信じることなくして、本当の光も希望もあり得ない。

主を信じ、魂に救いを頂いている我々は世の光となって、主に倣う生き方を通して主の素晴らしさを世に伝える責務があるだろう。ただ、その道は決して楽ではない。何故なら、主が歩まれた、他を救うために生きながらにして毎日犠牲となるような十字架道だからである。しかし、その十字架道を実践している時にこそ、主の聖霊は豊かに臨み真の平安が得られるのだ。

主は、

「天の全きが如く、地にもならしめてください」

と天の父に祈られた。本来、自由行為者として主に創り出されたはずの我々は、自らの罪（神の義の前に己を立てること、利己的に生きること、肉の次元）によって、天の全き次元を理解できない状態になってしまった。そこで主は、我々人類を救済すべく肉の次元の罪にまみれた地上に受肉され、我々に天の次元の根源的な義と生命と愛を与えようとされた。しかし、当時の為政者や民衆は主を受け入れず、十字架にかけて殺してしまう。肉なる次元は天の次元を受け取れないのだ。

肉なる人が天の次元を受け取れるようになるには、内的に造り変えられる必要がある。その為には、よくよく、肉の次元の空しさや限界を嫌と言うほど味わって、ようやく主に降参して、主の十字架で肉なる自分は既に裁かれ葬られて、根源的に罪なき者として赦されていることを感謝して受け取ることである。



(我が救い主はキリスト)

2020年3月15日

新型コロナウイルスがパンデミックの様相を呈してきたこともあり、世の中は、目に見えない恐怖によって閉塞状態に陥っている。そのような事態になった時に、人は何に頼るか、何を抛り所にするかについて、霊的に深い考察に基づいたご講筵が持たれた。

旧約聖書のミカ書4章5節は、

「どの民もおのの、自分の神の名によって歩む」

と、人間は何か頼らざるを得ない存在であること、すなわち、人は誰も自分が抛り所としているものと運命共同体になつて生きてゆく存在であることを述べている。それでは、あなたは、いったいどの神を抛り所とするのか。

無神論者を含む多くの人は、自分が抛り所、自分が神であるという生き方をするであろう。しかし、このような生き方で、現在のように万物が流転し、何時何が起こるかもしれない時代を、運不運、幸不幸と相対的にとらえ、諦めあきらの内に乗り越えてゆけるだろうか。

現在のように歴史上稀まれな事態が起こっている時にこそ、現象に振り回されずに、天上界に目を向けて自分の抛り所は何かを真剣に尋ね求める必要がある。それでは、我々は、何を抛り所とするのか。その答えは、徹底的に神様に従われたキリストの足跡を辿れば、自ずから明らかである。キリストは、どのような事態に遭遇しても、父なる神様に絶対の信頼をおかれ、自らの思いではなく、神様の御心をこの地に成らしめてくださいと祈られ、自分を捨てて神様の御意思に従順に従われた。

我々も、キリストにならい、我が抛り所、我が救い主はキリストであると、キリストに全托して「エン・クリスト」の現実に入れば、喜びも苦しみもキリストと共にし、自分の幸不幸に一喜一憂することのない平安と勇気をいただくことができる。パウロは、

「何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈りをなし、願ねがいをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思おもひにすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」(ピリピ書4章6節、7節)

と励ましてくれている。また、詩篇91篇9節〜16節は、神(現在ではキリスト)の絶対の守りを述べている。今のような時代であるからこそ、キリストを信頼してキリストと運命共同体になり、

「我キリストのうちに、キリスト我がうちに」

の「エン・クリスト」の霊的現実を生きてゆくことが、あらゆる困難を乗り越える一切の秘訣である。



(互いに忍び赦し合う)

2020年3月22日

「原に若草が青く萌えだすと、雪解けの水が高く音立てる。
私たちも春の喜びを歌おう、春を造られた神様を歌おう。」

今日、集会の初めに歌ったこの歌がぴったりの良い季節を迎えた。

今日の講筵はロマ書14章、15章の御言葉に注目しながら、団体生活や集まりを健全に維持していくための根底となる「愛」を学ぶものだった。奥田先生は、先ず、ロマ書13章8〜10節及び14章を読まれた。先生は、パウロが共同生活を行うにあたり寛容の精神を勧めていると話され、パウロの時代、民族によつて異なる神々があり、キリスト教が十分に受け入れられていなかった状況の中で、信仰の弱い者を受け入れよと勧め、兄弟を審くことさばを戒めている箇所注目された。

また先生は、パウロの心根が山上の垂訓（マタイ伝5〜7章）の箇所と響き合っているとされ、特にマタイ伝5章43節から48節に注目された。ここには、

「汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために祈れ」

とあるほか、

「天の父はその日を、悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ」

とあり、

「天の父の全まこときが如く汝らも全かれ」

とある。先生はこの箇所で次のように話された。山上の垂訓の内容と次元は、生身の人間には出来ないもので、天の次元に属し、新たな生まれ変わりを要することである。キリストは天と地の懸け橋となつてくださり、地に下つて、十字架の贖いに由り私たちをキリストと共に天の次元に生きる者と変えてくださった。そして、主にあつて柔和なる者、憐れみある者、隣人を愛する者、となるように励ましてくださっている、と。

次に先生はロマ書14章17〜19節を読まれ、17節は文語訳より新共同訳が分かりやすく、

「神の国は飲み食いではなく、聖霊によつて与えられる義と平和と喜びなのです」

が良いとされた。このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されるので、平和や互いの向上に役立つことを追い求めよう、と書かれている。

以上のとおり、パウロはローマにある聖徒たちに、具体的な共同生活上の問題に関し、まことに情け深い態度で接するようにと勧めている。ピリピの兄弟たちにも、凡そ真なること、正しきこと、愛すべきこと等を大事にするように勧め（ピリピ4章8、9節）、コロサイ書3章12〜17節でも、互いに忍び合い、赦し合うようにと勧めている。その根底には、人を分け隔てせず、万人に等しく愛を注ぐ深い愛が隠れている。



(新型コロナウイルスという見えない敵)

2020年3月29日

「忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互い同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。」(ローマの信徒への手紙15章5～6節)

現在、世界中が「新型コロナウイルス」という見えない敵の挑戦を受け、一致団結して立ち向かい、勝利することが求められています。パウロは、15章の冒頭において、

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。『あなたをそしめる者のそしりが、わたしにふりかかった』(詩篇69篇10節後半)と書いてあるとおりです。かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教導導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができます。」(1～4節)

と記しています。また、15章13節では、

「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。」

と励ましてくれています。先生は、詩篇から、

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」(46篇1節)

「民よ、どのような時にも神に信頼し御前に心を注ぎ出せ。神はわたしたちの避けどころ。」(62篇9節)

を。また、ヨハネによる福音書14章1節の、

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」

の御言葉を拠り所として祈り続けて行きたい、と。

更に先生は、予測を越えた不条理な事態の発生によって様々な苦しみ、痛み、悲しみをもたらされることがあっても、主イエス・キリストは、そのすべてを十字架で担って、苦しみ、痛み、悲しみを共にしてくださっている、と信じて。そして、「ローマの信徒への手紙」の8章18節以下の「将来の栄光」を信受し、31節～39節における「神の愛」の勝利を祈り続けて行こう、と呼びかけられました。



(3 密を避けるよう行動変容)

2020年4月5日

新型コロナウイルスの影響で、都市部を中心に、国民は3密（密閉・密集・密接）を避けるよう行動変容が求められている。主の御計画の中では、災害も疫病も無意味に存在している訳ではなく、きつと深い御心があり、我々人類が霊的に学び成長する為にあるように思える。つまり、この世の全ての事は過ぎ去るが、決して過ぎ去らないものは神の御言葉であることを学ぶ為に。このような時にこそ、神の御言葉を学んでいる我々は、他を救い主を証しする為に、生きながらにして毎日犠牲となるような働き（主が歩まれた十字架道）が求められると思う。たとえその働きがどんなに困難で苦しくとも、主が聖霊を通して力づけてくださるから絶対大丈夫である。集会では来週予定されている復活節集会に向けて、主の受難に関する聖書箇所を学んだ。

「主は、我々の背きの為に傷つけられ、砕かれた。主は、自ら懲らしめを受けて我々に平安を与え、その打たれた傷によって、我々は癒されたのだ。」（イザヤ53・5）

主は神の御心を第一として、己を捨てて、罪（神の御旨を退けて自分自身の意志に従って生きること、そのようにして幸せを得ようと考えること）にまみれた人類を救う為に、自ら我々の代わりに十字架の裁きを受け、命を捨ててくださった。キリストこそ完全無欠の義人。一方、生まれながらの肉の次元の人類の中に義人などいない、一人もいない。主が我々の身代わりとして十字架の裁きを受けてくださらなければ、人類の誰一人として愛や光や希望に満ちた永遠の命など望むべくもない。主がいなければ、人類に魂の救いなど永遠にあり得ない。イエスは弟子のペテロに、

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

と質問され、ペテロは、

「神からのメシア（救世主）です。」（ルカ9・20）

と答えた。奥田先生は、先生にとつての主は、

「お前の事はわたしが全部引き受けた。お前は無罪放免、無責任でいい。お前の全責任はわたしが引き受けた。だから、わたしという幹に繋がっていないさい。もう

自分を裁かなくていい。」

と言つてくださる存在であると告白された。同じ人が二人としていないように、主との関係は千差万別であるはず。「あなたは、わたしを何者だと言うのか。」という主からの問いかけに、我々はそれぞれどのように応えるだろうか。



(3密を避けるため4月12日以降休会)

2020年4月26日

奥田 昌道

京都キリスト召団の日曜日の集会は、4月12日(日)以降、休会を続け、本日(26日)で3回続けて休会と致しました。

本日、自宅に配布されてきた「5月1日付 きょうと市民しんぶん」によりますと、「京都市から市民の皆様へのお願い」と題する文章において、

「3密(密閉空間、密集場所、密接会話)を徹底して避けましょう。10人以上の集会や催し……は、やめましょう。必要な用事以外の外出は、控えましょう。」とありました。

こうした状況をも考慮して、京都キリスト召団の日曜日の集会を、5月3日及び5月10日の両日、休会とし、5月17日以降の集会開催の可否を、5月10日時点で判断したいと考えています。

皆様におかれましては、この機会に、これまで以上に深く聖書の「御言葉」に親しみ、「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言葉は霊であり命である。」

「人が生きるのはパンだけに依るのではない。神の口から出る一つ一つの言葉に依る。」

との主キリストの言葉を深く味わっていただき、「御言葉」(預言書も含めて)をノートに書き留めるなどして、

「我キリストの内に、キリスト我が中に」

を体感体得して頂きたく願います。

旧約聖書のアモス書の8章11〜12節を思います。

「見よ、その日が来ればと、主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渴くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ。人々は海から海へと巡り、北から東へとよろめき歩いて、主の言葉を探し求めるが、見いだすことはできない。」

古い聖書では、「み言葉の飢饉」と書かれていました。

奥田は、「祈りの友、手引書」として、「詩篇」を愛読しています。103篇、139篇、23篇、46篇、27篇以下、など、素晴らしいです。

皆様の上に、ご家族の上に、御護りと御導きが豊かにありますように！



(主キリストから賜わった新生命)

2020年5月3日

4月26日付の文書でお知らせしましたように、本日の「聖日集会」も休会としております。皆様には、いかがお過ごしでしょうか？

奥田の心に思い浮かんだ「御言葉」(聖書の言葉)の幾つかを以下に書いてみます。

①『「我なほ一たび地のみならず、天をも震はん」……我らは震はれぬ国を受けたれば、感謝して恭敬と畏懼とをもて御心になふ奉仕を神になすべし。」

(ヘブル書12章26～29節)

なお、同章18節～25節も。

「天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ行くことなし。」(マタイ伝24章25節)

なお、マタイ伝24章全部も。

②「我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント後書4章18節)

なお、同章7節～18節まで。

③「身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナ(地獄)に投げ入るる権威ある者を懼れよ。」(ルカ伝12章5節)

なお、同章1節～12節まで。

新型コロナウイルスは、たとえ、我々の身体に危害を及ぼすことが出来ても、我らの真の生命たる「主キリストから賜わった新生命(霊の命)」を損なうことは出来ません。

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また、我を信ぜよ」

と語りかけてくださる主キリストにこの身を全托して、常に『平安』のうちに過ごさたく願います。

④「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべき(血の)バプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思ひ逼ること如何ばかりぞや。」

「血のバプテスマ」とは、イエスの架かりたもうた「十字架」のこと。十字架に架けられる必要の全くない方(神の御心・御意に全身全霊を捧げきつて、御心・御意を成就なさった方)が十字架に身を捧げてくださったという「重い事実」をどれだけの人が認識(体感・体受)しているか？パウロは、

「我、主キリストとともに、十字架に付けられたり。最早、(旧き)我、生くるに非ず、復活の主キリストの新生命を賜わった我が中に、御霊のキリストが生きてあり給うなり」(ガラテヤ書2章20節)

と告白しています。

⑤「人もし我に従ひ来らんとせば、己を棄て、日々おのが十字架を負ひて



我に従へ。己が生命を救はんと思ふ者は之を失ひ、我がために己が生命を失ふその人は之を救はん。」(ルカ伝9章23節〜24節)

生来の人間は誰しも、「己が生命」を尊び、これを護ろうとします。「自己保存本能」が備わっているからこそ人は危険から身を護り、病気を防ぐ努力を惜しまないのだと思います。主キリストが、ここで語っておられることは、いわゆる「自我への執着」ゆえに、

「まず神の国と神の義を求める」

ことをせず、「自己中心の生き方」に陥りがちな人間の在り方に対して、人間本来の在るべき姿(相)を示されたのだと思います。

「己を棄て、日々己が十字架を負って主キリストに従う」

ことは生来の人間には不可能若しくは至難の業というほかありません。では、どうすれば良いのでしょうか？ その答え(解決)は、主が負ってくださいだった「十字架」に在ります。

「十字架を見てごらん。そこで(十字架上で)生来のあなたは、もう、死んでいるのだよ」

と。上記のガラテヤ書2章20節のパウロの告白は、そのことを示しているし、コリント後書5章17節に、

「人もしキリストに在らば、新たに造られたる者なり。古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり」

とあります。また、コロサイ書3章1節〜4節では、

「キリストと共に甦えらせて頂いた我々は、この世に在っては、既に死んだ者であって、その生命はキリストとともに神の中に隠されている。我らの生命であるキリストの現われ給うときに、我らもキリストとともに、栄光の中に現れるのである」

と約束されています。以上の外に、

⑥「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」(ヨハネ伝14章1節)

⑦「心安かれ、我なり、懼るな」(マタイ伝14章27節)

⑧「平安なんじらに在れ」(ヨハネ伝20章19節)

⑨「汝ら世に在りては患難(艱難)あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」(ヨハネ伝16章33節)

⑩「汝ら常に主に在りて喜べ、我また言ふ、なんじら喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ。主は近し。何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」(ピリピ書4章4節〜7節)

皆様におかれましても、それぞれに、御言葉から命と力とを賜わり、平安の中で日々を過ごされますようにと、お祈り致します。



(キリスト直結、一人一召団)

2020年5月9日

奥田 昌道

京都キリスト召団の日曜日の集会は、4月12日(日)以降、5月10日(日)まで休会としております。そして、「5月17日以降の集会開催の可否を、5月10日時点で判断したい」と4月26日付文書(「京都キリスト召団の集会に参加して下さっている皆様へ」)でお伝えいたしました。

新型コロナウイルスの感染拡大のため、非常事態宣言が全国を対象として5月31日まで延長されている状況を考慮しますと、京都キリスト召団の集会も、5月17日、24日の両日を休会とし、5月31日(日)に再開するのが適切であると考えています。

5月31日(日)は、今年の「聖霊降臨記念日(ペンテコステ)」の日です。そこで、その日に備えて、以下の聖書の箇所を熟読して頂きたく存じます。

① 「イエス・キリストの父なる神」の約束である「聖霊のバプテスマ」について
使徒行伝(使徒言行録) 1章1〜14節、2章全部

② パウロの伝道の根底ないし中核と云うべきは、「十字架と聖霊」であること。

(1) コリント前書1章18節〜2章全部

(2) ガラテヤ書2章20節

(3) ロマ書15章13節、同15章18〜19節

③ わたしたちに対する「聖霊賦与の約束」は、ヨハネ伝14章〜16章にあり、イエス・キリストの祈り(同17章「大祭司の祈り」)が、それを支えてくださっています。

主イエスは、

「此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」(ルカ伝12章49節)

と祈られました(5月3日付文書の④)。また、

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊^{いのち}なり生命なり。」(ヨハネ伝6章63節)

とも。

たとえ集会に集い、御言葉と祈りを共にすることが出来ない日が続いても、お一人お一人が、

「キリスト直結、一人一召団」(小池辰雄先生の言葉)

の心意気で勝利して下さるようにと、祈願しています。



(新型コロナ捕囚からの解放と正常な日常生活への復帰)

2020年5月17日

奥田 昌道

新型コロナウイルスの感染拡大防止のために出されていた「非常事態宣言」が解消され、「外出の自粛」も緩和されるなど、漸く明るい兆しが見えるようになりました。

この間の事態の推移を見てみると、奥田には、あたかも、昔のイスラエル民族が経験した「バビロン捕囚からの解放と祖国への帰還」のように、「新型コロナ捕囚からの解放と正常な日常生活への復帰」と言いたいように思えます。

本日、思い浮かんだ聖書の言葉や箇所を以下に記します。

① 「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたたちの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼びかけよ、苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。見よ、あなたたちの神、見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ、御腕をもって統治される。見よ、主のかち得られたものは御もとに従い主の働きの実りは御前を進む。主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め子羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。ヤコブよ、なぜ言うのか、イスラエルよ、なぜ断言するのか。わたしの道は主に隠されている、と。わたしの裁きは神に忘れられた、と。あなたは知らないのか、聞いたことはないのか。主は、とこしえにいます神、地の果てに及ぶすべてのものの造り主。倦むことなく、疲れることなく、その英知は究め難い。疲れた者に力を与え、勢いを失っている者に大きな力を与えられる。若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが、主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」(イザヤ書40章より)

(感想)この箇所は非常に慰め深いです。人は、しばしば、「骨折り損のくたびれ儲け」といった感を抱くことがあります。そのような時、上記の言葉は、大きな慰めと励ましを与えてくれます。また、奥田がマラソンを楽しんでいた頃には、「走っても弱ることなく、疲れない」を実感して、支えとしてきました。老年になって肉体は衰えましたが、心は、何時までも若々しく、みずみずしくありたい、と願っています。

② 「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。」(イザヤ書55章1節)

この言葉に接すると反射的に思い出すのは、ヨハネ福音書第4章の「イエスとサマリヤの女」の箇所です。

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至



る水がわき出る。」(13節)

また、ヨハネの黙示録22章の「新しい天と新しい地」(新天新地)の記述の中に、

「神と子羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川」

が描かれています。

「川は、都の大通りの中央を流れ、その兩岸には命の木があつて、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。」

(2節)

奥田は、鴨川に架けられている「丸太町橋」の上から、上流(北)を眺める時、また、川の土手を散策する時、いつも、この黙示録の情景を思います。同時に、京都キリスト召団は、まことに「良き地」に集会所を持つことが出来たなあ、と感謝の思いで満たされます。そして、主キリストの「十字架による救い」がそうであるように、すべて我々に必要なものは、神・キリストの側で備えてくださっており、我々は、ただ感謝して、それをお受け取りするだけである、と。空気も、太陽も、水も、大地も、万物の創造主である方からの贈り物・恵みである、と。

それでは、本日は、これで失礼いたします。皆様におかれては、日々、主キリストの御護りと御導きの中で、主より賜わる平安の中でお過ごしください。



京都キリスト召団集会再開のお知らせ。

2020年5月30日

5月31日(日)の聖霊降臨節から集会が再開されることになりました。自粛宣言が解除されても、コロナウイルスが消滅した訳ではありませんから、ウイルスが消滅して感染のリスクが無くなるまで待つということでは、集会再開の見通しは立ちません。

そこで、コロナウイルスの存在を前提としたうえで、次のような3密対策を講じて今後の日曜日の集会(聖日集会)を継続することにしました。

- 1 原則として毎週日曜日10時30分から聖日集会を継続する。
- 2 集会の時間短縮のために、従来の「最初の讃美歌、司会者の証言、兄弟姉妹の感話・証言、讃美歌、先生の講筵、祈り、讃美歌」という形式を改め、「讃美歌、先生の聖書朗読と祈り、簡潔なご講筵」という簡素なものにする。イメージとしては、夏季特別集会の早天祈祷のような形式にする。
- 3 出席は、各自の意思に任せるが、体調に問題がある時には、無理をしないで遠慮なく欠席されることを勧める。
- 4 集会場ではマスク着用と手洗いを厳守していただく。
- 5 席は、間隔を広く取るように配置されているので、それに従って座る。
- 6 常に風通しを良くするために、集会中に何度か換気をする。
- 7 湯茶は、提供しないので、各自が持参する。
- 8 集会終了後、交替で清掃をする。



十字架と聖霊——福音（キリスト道）の原点——

2020年5月31日

5月31日（日）の朝、「聖霊降臨節記念の日」に京都キリスト召団の集会室において、待望の集会（聖霊降臨節集会）を開催することが出来ました。5月30日付の「集会再開のお知らせ」で記したとおり、夏季特別集会の御所での早天祈祷会のような自由な形式で、奥田が最初から終りまで、集会をリードし、御言葉を語り、祈りと讃美歌を皆さまと共にするというやり方で恵みの時を持つことが出来ました。奥田の「講筵」の「題名」は、「十字架と聖霊——福音（キリスト道）の原点——」でした。私たちの信仰の内実は、この「十字架」と「聖霊」に集約されます。日々の歩みも、この原点（出発点であり、土台であり、正しき道へと導くもの）の上に築き上げられなければなりません。使徒パウロの言葉を借りるならば、

「我、主と偕に十字架に付けられたり、最早われ生くるに非ず」

即ち、「生来の我、自己中心的な肉なる我」は、十字架で既に葬り去られてしまっている（生来の旧き我は死んでいる）。そして、死を克服して新しい生命体として現われてくださった「復活の主キリスト」の霊的生命が、賜わった「新しき我」の中に、「聖霊（御霊・みたま）のキリスト」として生きてくださっている、即ち、

「キリスト我が中に生き給うなり」

なのです。これを日々の「現実」として歩み続けることを主キリストは願っておられるに違いありません。わたしたちは、意識せずに空気を吸って生きています。空気に包まれ、空気によって生かされています。「空気さん、有難う！」と言いたところ。陽光もまた、そうです。もし太陽が存在しなかったら、どうでしょう？ 地球は存続することが出来ません。太陽は、神の恵みの象徴と言って良いような存在です。主キリストは、

「天の父は、良き者にも悪しき者にも陽を昇らせ、直き者にも直からざる者に

も雨を降らせ給う。汝ら、天の父の全きごとく、全かれ！」

と諭しておられます。奥田は、住まいの近くの「丸太町橋」の展望台から上流の方（北）を眺めるのが好きです。春は東岸の桜の満開を楽しむことができますし、今は濃い緑の樹木の壮んな生命力に感動します。

「生命の水の川が都の大路の真中を流れ、兩岸には生命の樹があつて12種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を癒すなり」

と記されているヨハネ黙示録22章1～2節の情景を思います。同時に、わたしたちは、まことに素晴らしい場所、自然環境の中に「京都キリスト召団集会所」を備えて頂いたと感謝の思いに満たされます。新型コロナウイルスとの戦いは、まだまだ続くと思われれます。細心の注意が必要です。同時に、

「我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後何をも為し得ぬ者どもを懼るな、殺したる後ゲヘナ（地獄）に投げ入るる権威ある者（神）を懼れよ。」（ルカ伝12章4～5節）

との主キリストの励ましと「御護りと御導き」に委ねて日々を過ごしたく願います。



神讃美の生涯

——人生の目的は神讃美——

2020年6月7日

奥田 昌道

梅雨入りも近い本日（6月7日）、雲一つない晴天のもと、恵みの「聖日集会」を持つことが出来ました。10名の兄弟姉妹が集まってくださいました。「夏季特別集会の御所での早天祈祷会」をモデルにした自由な形で、初めから終りまで、奥田の主導で豊かな内容の集会となりました。

講筵は、「神讃美の生涯——人生の目的は神讃美——」と題して、詩篇103篇、同33篇、ガラテヤ書2章20節、ヨハネによる福音書3章16節を引用しながら、神・キリストは、わたしたちが、どのような外的状況・境遇にあつても、「神・キリスト讃美」の生き方を貫くことを願っておられることを語りました。マタイによる福音書6章25節から34節は、わたしたちの日々の在り方の模範（モデル）を示してくださっています。私たちは、ともすれば、衣食住に必要なものの充足と、生命の安全・保持を第一に考え、求め、神・キリストはその必要を満たし、保障してくださる存在者として、否、そういう方だからこそ、必要不可欠な存在として尊び、信心する傾向があります。それに対して、主イエスは、

「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、生存に必要なものは、すべて、添えて与えられるから」

と「神第一の生き方」こそが、人間としての本当の在り方であることを、諭されました。そこには、天の父なる神への「絶対の信頼」がありました。

「人が生きるのは、パンだけによるのではない。神の口から出る、一つ一つの言葉による」

と語っておられます。あの「主の祈り」（マタイ伝6章9節～15節）も、まず、

「父なる神の御名の崇められん事を」

で始まっています。奥田自身の人生の歩みの中で、このマタイ伝の6章25節から34節は、決定的に重要な生活上の指針となりました。何かと思ひ煩いの多かつた奥田にとって、この御言葉は、その後の人生を支えてくださいました。

「わが言葉は霊なり命なり」

でありました。讃美歌で奥田が愛唱しているのは、332番「主は命を与えませり」と517番「われに来よと主は今」です。他にも沢山ありますが、本日の講筵との関係では、この二つです。本来人間は、相より、相助け合う間柄でありたいのに、今日の状況は、その反対のことを要請しています。困難な状況に負けることなく、「相より、相助け合う」関係を築いて行きたいと願います。



「結果」に依存しない「信」

2020年6月14日

雨の予想の気象情報を覆すように、梅雨の晴れ間を賜わって、本日も熱い祈りの集会を持つことが出来ました。御出席いただいたのは、男性4名、女性4名と、少数ではありませんでしたが、短時間ながら、充実した集会となりました。

讃美歌は、354番「牧主我が主よ」、301番「山辺に向いて」、332番「主はいのちを」、527番「わが喜び、わが望み」。講筵で取り上げた聖書の箇所は、

- (1) マタイ伝8・5〜13（百卒長の信）、
- (2) ヨハネ伝20・19〜31（見ずして信する者は、さいわいなり）、
- (3) マルコ伝11・23〜24（「祈りたる事は、既に叶えられたりとせよ」）で、筵題は、「結果」に依存しない「信」。わたしたちは、日常生活において、「主キリストと共に生きる。主の御言葉を信受して生きる」と言いながら、祈った事、願った事が「祈った通りに、願った通りに」実現しないと、「祈りは聴かれていない、私の信仰が弱いからダメなのだ」と考えがちですが、そうではないのです。上記(3)の

「祈りたる事は、既に叶えられたりとせよ」

との主キリストの御言葉・御約束どおりに、「それは、天の次元において、既に成就している。現象界においてそれが見える形で現われていなくても、それに左右されてはいけない」と、単純に、素直に受け取って行くことが大切です。ローマの百卒長は、

「イエスの発せられる言葉は、必ず実現する」

と信じて疑わなかったのです。彼にとつては、それは、至極当然の事理だったのです。「御言葉を信ずる」とは、そういうことなのです。福音書で主イエスが語っておられる御言葉を、わたしたちも、そのような角度から、単純に、素直に「有難うございます」と感謝して受け取って行く。その積み重ねの日々でありたいです。

「人が生きるのは、パンだけに依るのではない。神の口から発せられる一つ一つの言葉による」

「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない。わたしが語った言葉は、霊であり命である」

「我を信する者は、死すとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝、これを信するか？」

などの主キリストの言葉を、わたしたちは、素直に単純に信受して、「キリストと共なる生活」、「我、キリストの中に。キリスト、我が中に」の恵みの現実の中で、神・キリスト讃美の日々を送りたいと願います。詩篇は、そのような「讃美と祈り」に満ちています。主イエスも、詩篇を愛読なさいました。「新型コロナウイルス」が、わたしたちの生活をかき乱している状況下ではありますが、「御霊の我が主は、わが身を抱き、十字架に耐えうる力を賜う」との小池先生作詞の言葉のように、わたしたちは、一方では注意深く危険を避けながら、他方では大胆に主キリストの御護りと御導きを信じて、天の高みを目指して「神・キリスト讃美」の日々を過ごしたいと願います。



喜び、歓喜

2020年6月28日

雨上がりの曇り空の下、本日も、兄弟姉妹が「聖日集会」に集ってくださいました。集会は、夏の特別集会の「早天祈祷会」をモデルにした形で、奥田の主導のもと、聖書朗読と奥田の講筵、いのり、讃美歌または聖歌の斉唱という順序で進められています。

本日の聖書朗読は、詩篇103篇、同19篇、同91篇。講筵後の祈りの後は、聖歌467番「みくにのこちす」を斉唱しました。

本日の講筵題目は、「喜び、歓喜」としました。このところ、世の中は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、会合やイベントの自粛（中止ないし延期）が常態化し、なにと重苦しい雰囲気が漂っているように感じられます。そして、「喜び、歓喜」が失われているように思えます。わたしたちは、「新型コロナウイルス」という「目に見えない敵」に対して、細心の注意を払う必要がありますが、同時に、主キリストの御言葉、

「身を滅ぼすことが出来ても、それ以上のことが出来ない者どもを懼れるな、身を滅ぼした後、魂をゲヘナ（地獄）に投げ入れる権威ある方を懼れよ」

を真剣に体受して、御国への旅路を感謝と喜びをもつて続けたく願います。その観点から、詩篇91篇は味わい深い詩篇です。

「至上者いとたかきもののもととなる隠れたる所に住まうその人は、全能者の蔭に宿らん。われは、主はわが避け所、わが城、わが依り頼む神なりと言わん。そは、神、汝を……、毒を流す疫病えやみより助け出し給うべければなり。彼、その羽をもて汝を蔽い給わん。汝、その翼の下に隠れん、その真実まことは楯たてなり小楯こだてなり。夜は驚くべきことあり、昼は飛び来る矢あり。暗きには歩む疫病えやみあり、昼には損なう激しき病あり、されど、汝、懼るることあらじ。……」

まるで、新型コロナウイルスの猛威を予言しているような詩篇です。そして神に信頼する者の勝利を高らかに謳います。

「汝、先に言えり、主はわが避け所なりと、汝、至上者いとたかきものをその住居すまいとなしたれば、災害わざわい汝に至らず、苦難なやみ、汝の幕屋（住まい）に近づかじ。そは、至上者、汝のためにその使者つかいたちに命じて、汝が歩むもろもろの道に汝を守らせ給えばなり。かれら、手にて、汝の足の、石に触れざらんために、汝を支えん。……彼、その愛を我（主なる神）に注げるがゆえに、我、これを（彼を）助けん、彼、我が名（主なる神の名）を知るが故に、我、これを（彼を）高き所に置かん。彼、我を呼ばば、我、応えん、我、その（彼の）苦難くるしみの時に偕に居りて、之を（彼を）たすけ、之をあがめん。我、長寿（長きいのち）をもて、彼を足らわしめ、且つ、我が教えを示さん。」

と。主イエス・キリストは、この詩篇の祈りと神の約束（誓い）を引き取って、わたしたちの身に成就してくださっています。現実の生活において、現象面では、逆の様相を呈しても、それに左右されることなく、信じ抜く所に勝利が宿ります。

主は、十字架でわたしたちの「マイナス面」を消し去り、新しい生命力を与えてくださり、聖霊によって、「喜び、感謝、讃美」の日々を送れるように導いてくださっています。



祈りたる事は叶えられたりとせよ

2020年7月5日

雨上がりの曇り空の下、本日も、兄弟姉妹が「聖日集会」に集ってくださいました。
本日の聖句は、

「凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし」(マルコ伝11章24節)

でした。マルコ伝のこの箇所は、主イエスの十字架が迫っている時期です。11章12節から読みますと、主イエスの、わたしたち普通の人間と変らぬ「人間的な」面と、「神の子」らしい面との両方を垣間見ることが出来ます。12節以下では、宿泊先のベタニヤから出て来られた空腹のイエスが「葉の繁ったイチジクの樹」をはるか彼方から見つけて、「これ幸い」と近づいて見れば、実が成っていないかった。そこで「今から後、いつまでも、実を結ぶことの無いように!」との言葉を発せられた。これは「無茶な、無理な注文」です。というのは、実が成っていないかったのは、「イチジクの実の成る季節」ではなかったからなのです。可哀そうにイチジクは翌朝、通りかかった時には、根元から枯れてしまっていました。マタイ伝21章18節以下では、「今より後いつまでも実を結ばないように」と言われたら、^{たちどころに}即刻枯れてしまった、と記されています。以上は、イエスの、わたしたちと変らぬ人間的な面です(それ自体は、誉められた話ではない。失敗談)。ところが、イチジクが枯れてしまったことに驚いたペテロに対して、次のような言葉を発せられました。

「神を信ぜよ。まことに汝らに告ぐ、人もし此の山に『移りて海に入れ』と言ふとも、其の言ふところ必ず成るべしと信じて、心に疑はずば、その如く成るべし。この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」(マルコ伝11章20節〜24節)

この、「凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」(祈りたる事は、叶えられたりとせよ)は、わたしたちの日常生活において、たいへん大切な御言葉、主キリストからの祝福の約束です。わたしたちは、「祈る特権」を頂いているのです。

「かくのごとく、御霊も我らの弱きを助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを

知らざれども、御霊みづから言ひ難き呻きをもて執り成し給ふ。……」(ロマ

書8章26節以下)

主キリストの「御名によって」祈るとは、「主キリストご自身が、わたしたちと一体となつて祈ってください」事を意味しています。それが、わたしたち一人びとりの為に十字架上で命を投げ出してくださいったお方(主イエス・キリスト)の御本願です。「我、主の中に。主、我が中に」(エン・クリスト)は、思われたる世界、観念の事態ではありません。主イエスが命がけで「神への道」となつてくださり、「我は、道なり、まこと(真理)なり、いのち(生命)なり」「汝と我とは一つなり、故に、何事にても、『わが名によりて』祈り求めよ、さらば得べし(成るべし)」と約束してくださいったのです。だからこそ、「祈りたる事は、叶えられたり」とし、「凡て祈りて願ふ事は、既に得たり」と信じて、晴れやかに、そして穏やかに、勝利の日々を生きて行くことが出来ます。



わが賜りし福音

2020年7月12日

雨上がりの曇り空の下、本日も、兄弟姉妹が「聖日集会」に集ってくださいました。

本日の講筵「わが賜りし福音」に入る前に、前回の集会で取り上げた「イチジクの樹において生じたこと」（マルコ伝11章12〜14節、20〜21節）について、M兄とH兄から頂いた文章を紹介しました。

M兄…「いちじくの木への呪いは、譬^{たとえ}です。何度も何度もイエス様は、エルサレムとその指導者たちに悔い改めを呼びかけられましたが、拒絶されただけであつた。彼らは主様の愛をこぼんで自ら破滅した。見せかけの葉をひらひらさせている実のならないこの木は、ユダヤ国民の象徴であつた。イエス様は、イスラエル滅亡の原因と必然性を弟子たちにはつきり示したいと望まれた。」（続けて、エレミヤ書6章19節を引用）

H兄…「この御言葉に至る無花果を枯らすお話は、ある注解書によれば当時のエルサレムにおける墮落した信仰状態を表しているとのことでした。それが、宮清めの行動に繋がっていて、それで、ペテロ等の弟子にこの御言葉を語っておられるのだと考えています。」

お二人が述べておられることは、それぞれに正当なのだと思います。福音書に記述されたイエス・キリストの足跡、言葉と行動（御業）に対する対し方（どのように受け取るか）は、人それぞれに異なると思います。

奥田の福音書の読み方は、それぞれの場（場面）に自分も居合わせているような「臨場感」をもつて受け取りたいと思っています。五つのパンと二つの魚をもつて、男だけで5千人という大群衆を飽きるほどに食べさせられたという記事、次いで独り山に登って祈られた後、夜明けの4時頃に湖上を歩み、逆風に漕ぎ悩んでいる弟子たちを励まされた話（いづれもマルコ伝6章30節以下）など、ほんの一例ですが、凡て、そのままに受け取っています。聖書を読んだ時に味わう「感動」を大切にしたいと思っています。そして、何よりも大切な事は、現在、常に、「みたまの主キリスト」が「我が中に宿ってくださっている（内住の霊なるキリスト）」ことです。小池讃美歌（B2「使徒らの昔を」）に、「みたまの我が主は、わが身を抱き、十字架に耐えうる力を賜う」という現実です。その土台は、十字架です。

「我、主と偕に十字架に付けられたり。最早、我生くるに非ず、御霊のキリス

ト、我が中に生き給うなり」（ガラテヤ書2章20節）

の事態です。これら凡ては、主キリストがなさってくださいだった御業、恵みの御業です。それを、「受け取れよ」と差し出してください。無条件に、「ハイ、有難うございます」と受け取るだけです。わたしたちを「神の子」として新たに生れさせるために、ご自分の命を捧げてくださった主イエス・キリストの御思い（愛）にお応えする道は、上記のガラテヤ書2章20節を祈り心で生きること、「あなたの御心（御意）をこの身において、為させてください」との祈りで生きることだと思っています。それが、人に対しては「愛」、仕事に関しては「天賦天職」の自覚を持つて貫くことだと思っています。



「生命の御霊の法」 VS (対)「罪と死の法」

2020年7月19日

梅雨期の間の良く晴れた大空の下、本日も、熱い祈りの集会を持つことが出来ました。

講筵の題目は、「^{いのち}生命の御霊の法」^{みたまのり} VS (対)「罪と死の法」。要旨は、次の通りです。
人間の一生を典型的な(人それぞれに千差万別である現実の相を捨象したときの)例で考えると、以下のような諸段階に分かれます。

① 幸福に満ちた幼児期……「知恵の樹の実」を食べる前のアダムとイブの姿(相)
② 自我の目覚めの時期……「自主独立路線」に歩み出す。「生」と「死」と「罪」の自覚が生ずる。聖書的には、「罪と死の法」の支配下に入る。

③ キリストとの出会い……キリストが掴まえてくださった。それまでの「自我を確立し、幸福を追求する自己中心路線」から脱却し、「神の国と神の義」を追求する「神・キリスト中心の路線(生き方)」へと転換しての新しい歩みを始める。同時に、「自分は、如何にして神の前に義たり得るか」に悩む。

④ 十字架の贖い(贖罪、根源的な罪の赦し)を体験・体得し、新しく賜わった命に^{いのち}生きる……「この身を通して、神・キリストの栄光の顕現すること」を願い、「^{てんぷ}天賦天職」を自覚して、それに身を捧げて生きたいと願う。

以上は、奥田の個人的な歩み(体験)を述べたものです。人それぞれに、その歩みは、千差万別であると思いますが、様々の体験・経験を経て、

「我、主(キリスト)と^{とも}偕に十字架に付けられたり、^{もはや}最早、我、生くるに非ず、キリスト(みたまのキリスト)、我が中に在りて生き給ふなり」

を霊的根源現実として生きる生き方を、主キリストは願っておられるのではないか、と思っています。その者の祈る祈りは、あの「主の祈り」です。以上のような観点から、ロマ書8章を読みますと、何と素晴らしく、わたしたちの「霊の事態」を解き明かしてくれているか、と驚きます。凡ては、主イエス・キリストがご自身の尊い犠牲を通して賜わったプレゼントです。これを全身全霊で体受・体得して、日々、新しい命に生きること、「生身の、見える現実の姿(相)」に捉われるのではなく、「見えない、賜わりたる栄光の姿(相)」を信受、体受して、凱歌を挙げて生きることが主キリストは願い、望み、力づけ、導き給います。

「我々は、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからである」(コリント後書4章18節)

とある通りです。



今日も明日も次の日も我は進み往くべし

2020年7月26日

梅雨期に入り、不順な気候が続きます。皆さま、お変わりなく、お過ごしでしょうか？
本日の集会は、男性は奥田の外に2名、女性は4名の少人数の集会でした。講筵題目は、

「今日も明日も次の日も我は進み往くべし」(ルカ伝13章33節)

新約聖書を読んでいて、主イエス・キリストの、このルカ伝の御言葉に感動と励ましを頂きました。福音書に現れた主イエスの御姿を辿りますと、前進して止まらない壮なる御姿に気付きます。「湖上を歩み給う主イエス」を描いたマルコ伝6章48節では、「風逆らふに因りて、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明けの4時ごろ、海の上を歩み、その許に到りて、行き過ぎんとし給ふ。」とあり、復活された主イエスがエマオの途上で二人の弟子に近づいて共に歩まれた場面では、「遂に往く所の村に近づきしに、イエスなほ進みゆく様なれば」と描かれています。このように、主キリストは、常に「前進して止まず」のお姿を示して、わたしたちを励ましてくださっています。この主イエスの御姿に共感するかのときパウロの言葉がピリピ書3章にあります。

「われ既に取れり、既に全うせられたりと言ふにあらず、唯これを捉へんとて追ひ求む。キリストは之を得させんとて我を捉へたまへり。兄弟よ、われは既に捉へたりと思はず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向ひて励み、標準^{めあて}を指して進み、神の、キリスト・イエスに因りて上に召したまふ召しにかかはる褒美^{ほうび}を得んとて追ひ求む。」(12〜14節)

このパウロの言葉に呼応するかのように、ヘブル書10章36節以下では、

「なんじら神の御意を行ひて約束のものを受けん為に必要なるは忍耐なり。『いま暫くせば、来る者きたらん、遅からじ。……もし退かば、わが心これを喜ばじ』」

と励まし、13章8節では、

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給ふことなし。」

と宣言して、わたしたちにエールを送ってくれています。この主イエスは、前進して止まらない壮なる主イエス・キリストです。常に、わたしたちと共に在り、共に歩み、艱難に遭う時には担い励ましてくださる主キリストです。パウロのロマ書8章18節以下には、わたしたちの受ける苦難と栄光が描かれています。その中で、我等をキリストの愛より離れしむるものは存在しない、どのような患難、苦難、危険が迫り来ようと、「主イエス・キリストにある神の愛から我らを離れしむる」ことは不可能だと、勝利宣言をしてくれています。現在の世相を見ますと、新型コロナウイルスの感染拡大が一向に収まらず、団結ではなく分断を余儀なくされているような厳しい現実があります。そのような状況に置かれながらも、わたしたちは、「見える物ではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であるが、見えないものは永遠に存続するのだから」とのコリント後書4章16節〜18節の言葉に励まされて、前進して止まない姿で進みたいと願っています。



人は何によって生きるか？

2020年8月2日

本日も、少人数ながら、御言葉中心の集会を持つことが出来ました。講題題目は、「人は何によって生きるか？」で、マタイ福音書4章4節の、

『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである』と書いてある」

に由来します。旧約聖書の申命記8章では次のように記されています。

「あなたの神、主がこの40年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたの知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった。」(2～3節)

申命記8章から11章を読みますと、イスラエル民族に対する神の命令を守ることにによる「祝福」と命令に背くことによる「呪い」が記されています。10章12～13節では、

「イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求められる事はなんであるか。ただこれだけである。すなわち、あなたの神、主を恐れ、そのすべての道に歩んで、彼を愛し、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に仕え、またわたしがきようあなたに命じる主の命令と定めとを守って、さいわいを得ることである。」

とあります。ただ、読んでいて気付くことは、そこで言われている「祝福」にせよ、「呪い」(禍)にせよ、その内容は、「地上の、現世の」ものだということです。「地上の、現世の幸・不幸」に左右されない、真の「祝福、さいわい」を示し、与えようとしてくださったのは、主イエス・キリストでした。福音書の主イエスの言葉、約束を、その角度から受け取って頂きたいと願います。しかも、それは、我々の側の「善行」とか「努力精進」とかによってではなく、主イエスの一方的な愛(贖罪)の故であり、それを、全存在でお受けすること(これが、「信仰」と呼ばれている事態です)によってであることを、今一度、確認して頂きたい願います。ヨハネ福音書4章のサマリヤの女との対話の中で、主イエスは、

「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも渴く事が無いばかりか、その水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧きあがる」

と語られ、その間に町で食物を買い求めて戻って来た弟子たちに、

「わたしには、あなたがたの知らない食物がある。その食物とは、わたしを遣わされたかたの御意^{みこころ}を行い、その御業を成し遂げることである」

とお答えになっています。ヨハネ福音書6章では、

「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴く事がない」(35節)

と繰り返し語っておられます。わたしたちのためにすべてを備え、命への道を開き、永遠の命を与えてくださった主キリストと「一如一体」とされて、祈り心で生きるようにと、主は願っておられます。



汝は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり

2020年8月16日

今年の夏の「聖日集会」は、8月16日(日)で終りとし、次回は、9月6日(日)に再開することとなりました。例年ですと、8月下旬の金曜日から日曜日にかけて、2泊3日の「夏季福音特別集会」を開催するところですが、今年は、諸般の事情を考慮して、特別集会の開催を断念することと致しました。8月16日(日)の集会での講筵の要点を、以下に記しておきます。講筵題目は、「汝は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」で、主イエスが洗礼者ヨハネから水の洗礼をお受けになった時の天よりの声、

「汝は我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ」(マルコ1章11節、ルカ3章22節、マタイ3章17節)

に由来します。この言葉は、福音書では、もう一度出て参ります。それは、イエスが山上でまばゆい姿に変貌された時に雲より声があつたとして記されているものです(マタイ17章5節、マルコ9章7節、ルカ9章35節、参照)。私(奥田)が申し上げたいことは、主イエスがお聴きになったこの天よりの御声を、私たち一人ひとりが、主様からの御声として聴くことです。主イエスが「御父」として慕い、信従された神からの信愛の言葉を、今度は、私たちが主イエスからの言葉としてお受けすることです。主イエス・キリストから、

「汝は我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ」

と言つて頂けるとは、何と有難く、嬉しいことではありませんか! 「こんな私を? こんなダメな自分なのに、『我が愛しむ子、悦びの子』と言つてくださる。その通りに受け取つて良いのかしら?」と疑問を抱かれる方に、申し上げたい。主イエスは、そのダメな自分のすべてを十字架で負つてくださった。生来の「旧い自分、自我に捉われたダメな自分」を主イエスは、全部、十字架で消し去つてくださった。パウロと共に

「我、主と共に十字架に付けられたり。最早(旧き)我、生くるに非ず、御霊のキリスト、我が中に在りて生き給うなり」

を信受して、今や、自分は「主の愛しみの子、主の悦び給う者」とされた、と大胆に受け取り、感謝と讃美の中で、主イエスの御旨、自分に託された使命を果たすべく「御言葉、御霊」に導かれて生きることが、私たちの新しい生き方であると確信いたします。

小池先生の作になる讃美歌に、「御言葉、御霊は我が命なり、イエス・キリストの無者たる僕」というのがあります。小池先生の福音の核心は、「十字架・聖霊一如の恵み」です。どこまでも、「平伏し」の心です。十字架で「ゼロ(無)」にされた所に、聖霊が臨み給う。

現実のこの世は、今、行き詰まり(閉塞)状況にあるように映ります。現実が、現象面がどのようなであろうとも、わたしたちは、

「見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからである」

との聖句に励まされて、主キリストの御護りと御導きの中で、感謝と讃美の日々を送りたいと願つてやみません。



小さき者を顧み給う神（聖書随想①）

2020年8月30日

今年の夏は、残念ながら「夏季福音特別集会」を開催出来ないでおります。また、聖日集会も8月23日、30日は休会としています。そこで、本日は、表記の題名で聖書から御言葉拾ってみました。社会の現実においては、何時の時代でも、「力強い者、大いなる者」が尊ばれ、世の中を支配しがちです。しかし、旧約聖書の「詩篇」や、新約聖書においては福音書を初め、使徒書簡において、「いと小さき者への顧み」が顕著です。

詩篇第8篇においては、

「なんじは嬰兒おななちのみごの口により力の基もとをおきて、敵にそなへ給へり。こは仇人あたいととうらみを報ゆるものとを鎮静おしずめんが為なり。」

とあります。福音書では、キリストの聖誕の地について、

「かれら言ふ『ユダヤのベツレヘムなり。それは預言者によりて、「ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長たちの中にて最小ちひよき者にあらず。汝の中より一人の君いでて、わが民イスラエルを牧せん」と録しるされたるなり』」（マタイ2・5〜6）

と。また、イエスに語りかける天の父なる神に対する応答、

「天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智かしこき者・慧さとき者に隠して、嬰兒みどりごに顕し給へり」（マタイ11・25、ルカ10・21）

さらに、

「懼るな、小き群よ、なんじらに御国を賜ふことは、汝らの父の御意みこころなり」（ルカ12・32）。

また、再臨のキリストの預言の場面（マタイ25・31〜46）において、

「わが兄弟なる此等のいと小き者に為なしたるは、即ち我に為したるなり。……

此等のいと小き者の一人に為さざりしは、即ち我に為さざりしなり。」

次いで、使徒書簡においては、

「神は……世の愚かなる者、弱き者、無きが如き者を選び給へり。」（コリント前書1・27〜28）

とあります。このように見て来ると、聖書、即ち神・キリストの次元は、この世のそれとは「正反対」と言つてよいほど、異なっていることが分かります。俗世間の諺に「棄てる神あれば、拾う神あり」というのがあります。神・キリストは、正に「拾う神」であり給います。これは、現世において、誠実に生きようとしても報われない状況にある人々にとって、大きな慰め、励ましと言ふべきではないでしょうか。また、コリント後書4章16〜18節においては、

「我らは落胆せず、我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々になたなり。

……我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時しばらくにして、見えぬものは永遠とこしへに至るなり。」

とあります。わたしたちは、「主キリストによる贖罪あがなひと聖霊の賦与」という「無形の宝」を賜っていることに感謝しつつ、讚美と祈りの日々を送りたいと願っています。



まず『神の国』と『神の義』とを！

2020年9月6日

酷暑の8月が終り、初秋の9月を迎え、集会もまた新たな気持ちで「新しい出発の時」を迎えました。講筵題目は、「まず『神の国』と『神の義』とを！」でした。

1. マタイ6・25～34

「まず、神の国と神の義とを求めよ。さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな……」

「神の国」も「神の義」も、主イエスご自身が、その実体であり、体現者です。「神の国」と「神の義」とを求めよ、とは「私（イエス）を求めよ」と言うこと。そして、主イエスは、

「我は道なり、真理なり、生命なり」（ヨハネ14・6）

と宣言してくださって、このお方を信受・体受して生きるのが、「本当の生き方、我々の生きる道」であることを示してくださいました。

2. ロマ書1・17

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」

信仰とは、福音を信受・体受すること、その中に生きること。

福音とは、イエス・キリストに関わる凡てのこと。その核心は、神の子・神の現象体であるイエス・キリストが神の御意・御旨に従って十字架に死に、その死により我々の罪を贖ってくださったこと（贖罪）、復活を以て「死」に打ち勝ち、死を以て終らない「霊的生命」（永遠の生命）を実証し、イエスを信じ従う者（信受する者）に同質の霊的生命を賜っていることです。ガラテヤ書2章20節は、その告白（勝利宣言）です。

3. ロマ書5・8

「我らがなほ罪人^{つみびと}たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに対する愛をあらはし給へり」

「主は我らの罪のために付^{わた}され、我らの義とせられん為に甦^{よみがえ}へらせられ給へるなり」（同4・25）

主イエスの3年間の伝道（御業と御言葉）は、神の愛の実践・実証であったが、その極致が十字架での死（我々の「罪と死」を代わりに引き受けてくださったこと）であった。

ご復活（輝く霊体としての顕現）は、神の義と愛の成就、勝利の宣言であった。

4. 死より甦り、輝く姿で顕現された主イエスは、天（父なる神の御許）に昇られた後、聖霊の姿で我ら一人ひとりの中に宿り、我らと一如・一体となつて愛の御業を為そうとしておられる。

「汝ら我を選びしに非ず、我、汝らを選びたり……」（ヨハネ15・16）

この主イエスを信受・体受し、「この身を通して、あなたの御心（御意）を成就してください」との祈りに生きる所に、新生を賜った私たちの「生き甲斐、喜び」があり、感謝と讃美の日々を歩むことが出来るのだと思っています。



いつまでも存続するもの 信仰・希望・愛

——「見えるもの」と「見えないもの」——

2020年9月13日

「神は霊なれば、拝する者も霊と眞^{まこと}とをもて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)

「イエス言ひ給ふ『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』」(ヨハネ20・29)

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實^{まこと}とするなり。」(ヘブル11・1)「この故に我らは落胆^{きおち}せず、我らが外なる人は壊^{やぶ}るれども、内なる人は日々^{あらた}に新なり。それ我らが受くる暫くの軽き患難^{なやみ}は、極めて大なる永遠^{とこしへ}の重き光榮を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるもの暫時^{しばしば}にして、見えぬものは永遠^{とこしへ}に至るなり。」(コリント後書4・16～18)「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕^{たかぶ}らず、非礼を行はず、己の利を求めず、憤^{おも}ほらず、人の惡を念はず、不義を喜ばずして、真理^{まこと}の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。愛は長久^{いづ}までも絶ゆることなし。……げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」(コリント前書13・4～13)「永遠^{とこしへ}の生命は、唯一の眞^{まこと}の神にいます汝と、なんじの遣^{つか}し給ひしイエス・キリストとを知るにあり。」(ヨハネ17・3)

我々は、日々の生活の中で、「見えるもの」(現象界に生起する事態・事象)に捉われ、一喜一憂しがちである。主イエスの御言葉や、パウロ、ペテロ、ヨハネの書簡やヘブル書は、「見えるもの」(現象界)の奥にある世界(「見えぬもの」、根源界、天界)に目を注ぐようにと促している。そして、我々の思いを超えて、最善を備えてあり給う主キリストに信賴すること求めている。

「望むところを確信し、見ぬ物を眞實^{まこと}とする」

とは、主の約束(御言葉)に信を置く(信賴する)事、そして、感謝と讚美の心で日々を生きたること。思い煩いの多かった奥田にとって、マタイ伝6章25節～34節の主の御言葉は、現在に至るまで、何と慰め深い、励ましの御言葉であることか！ 主の御言葉(御約束)は、絶対に裏切らない。この御言葉と響き合っているのが、詩篇第103篇である。イザヤ書40章以下もそうである。マタイ伝11章25節～30節も加えたい。

主は十字架で、奥田の過去・現在・未来の全て(善も惡も、罪も死も)を担い切ってください(ロマ書8章1～2節)。眞の天国人(永遠の生命を賜った者)となった。感謝、讚美あるのみ！そして、「主の祈り」を生きたる者でありたい。



忍耐の勝利

2020年9月20日

詩篇40篇、

「われ耐へ忍びて主を俟ち望みたり、主われにむかひてわが号呼を聴き給へり。また我を滅びの穴より泥の中より取り出して、わが足を磐の上に置きわが歩みをかたくし給へり。」

主は新しき歌をわが口に入れたまへり、此は我らの神にささぐる讃美なり、多くの人は之を見ておそれ且つ主に依り頼まん。

主を己が頼みとし、高ぶる者によらず虚偽に傾く者に依らざる者は幸福なり。」

ヘブル書10章36節～39節、

「汝ら神の御意を行ひて約束のものを受けん為に必要なるは忍耐なり。『いま暫くせば、来るべき者きたらん、遅からじ。我に属ける義人は、信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ』然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。」

ヤコブ書1章2節～4節、12節、

「わが兄弟よ、なんじら各様の試練に遇ふとき、只管これを歡喜とせよ。そは汝らの信仰の験は、忍耐を生ずるを知ればなり。忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、欠くる所なからん為なり。」

「試練に耐ふる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛する者に、約束し給ひし生命の冠を受くべければなり。」

ロマ書5章1節～4節、

「斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。また彼により信仰によりて、今立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。」

コリント前書13章より、

「愛は寛容にして慈悲あり。凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。愛は長久までも絶ゆることなし。」

忍耐を支えるものは、主キリストの十字架とその勝利である。

明けない夜（試練の時、忍耐の時）は無い。必ず、朝（希望の成就する時）が来る。また、

「主は、耐え忍ぶことの出来ないほどの試練に遭わせ給わない。必ず、逃れの道を備え給う」（コリント前書10章13節）



御名

2020年9月27日

使徒行伝3章のペテロとヨハネを通して為された主の御業、即ち、生まれながらの足の不自由な男の人が、

「金銀は我に無し、されど我に有るものを汝に与ふ、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め」

との言葉とともに手を取って引き起こされると、たちどころに足とくるぶしが強くなり、躍り上がって自分で立ち、歩き出し、神を讃美しつつペテロ、ヨハネと共に宮に入った。民は皆、「その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた」(新共同訳)

この出来事に付いてペテロは、神が死人の中より甦らせたそのお方(イエス)の、

「御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健くしたり。イエスによる信仰は、汝等もろもろの前にて斯かる全癒を得させたり。」(3章16節)

と、「御名」の御業の勝利を宣言している。聖書において、「名」が如何に大切であるかを取り出してみよう。

創世記17章1～6節、

「もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。」

出エジプト記3章13～14節、

「わたしはある。わたしはあるという者だ。」(我は、在りて在る者なり。)

福音書から、

① 主の祈り「願はくは御名の崇められん事を。」(マタイ6:9)

② 「二人わが名によりて集る所には我もその中に在るなり。」(同18:20)

③ 「凡そ我が名のために、或は家、兄弟、姉妹、父、母、子、田畑を棄つる者は、数倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。」(同19:29)

④ 羊の牧者は、「己の羊の名を呼びて牽き出だす。羊、その声を知るによりて従ふなり。」(ヨハネ10:3～4)

⑤ 「汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之を為さん、……何事にても我が名によりて我に願はば、我これを成すべし。」(同14:13～14)

⑥ 「助け主、即ち、我が名によりて父の遣したまふ聖霊は、汝らに萬の事を教へ、又すべて我が汝らに言ひしことを思ひ出さしむべし。」(同14:26)

⑦ 「汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且つその果の残らんために、又おほよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜はんために汝らを立てたり。」(同15:16)

「汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし。」(同16:23)

⑧ 「聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守りたまへ。」(同17:11)

「名」は「体」を表す。主の御名を呼びまつる時、主自身と「一如・一体」とされる。



暗きに坐する民は大なる光を見

死の地と死の蔭とに坐する者に光のぼれり

2020年10月4日

上記の箇所はイエス・キリストがナザレを去って、ゼブルンとナフタリとの境であるカペナウムに住み給うたことについてイザヤの預言の成就として引用されたものである。

『ゼブルンの地、ナフタリの地、海の辺、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、

暗きに坐する民は、大なる光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれり』(マタイ伝4章16節)

と。自然界では、悠久の昔より太陽が地球を照らし、万物を活かしている。万物に命を与えている。人間も自然の一部として、太陽の恩恵を蒙って生存してきた。霊的存在者としての人間は何によって生きて来たのか？ 自分自身について言えば、キリストを知らなかった青年時代、自分の内面の醜さと不安のために、「生の喜び」は消え失せ、正に

「暗きに坐する民、死の地と死の蔭とに坐する者」

であった。もしも主キリストを知らないままであったら、どうなっていただろうか？

内面の暗黒の中で呻吟していた私にキリストを伝えてくれた人が居たお蔭で、暗闇のどん底から救い出され、新しい人生へと歩み出すことが出来た。今、思えば、キリストの方から私に出会ってくださったのだ。光が差し込んだ、光に導かれる者となった。

マタイ福音書では、上記引用のイザヤ預言の後に、

「この時よりイエス教を宣べはじめて言ひ給ふ『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』」

と。キリストを信ずるとは、キリストに従うとは、それまでの生き方から180度の方向転換をすること、最早、自分が人生の主人ではない、キリストが「主」であり、自分は「僕」だ。帰依するとは、そういうことだ。自分がどこまでも「主人」で居たい人は、キリスト信徒にはなれない。

キリスト信徒になる前の私は、「現在」を本当に生きることが出来れば、それ以上のことは望んでは居なかった。

「朝に道を聴かば、夕べに死すとも可なり」

であった。ところが、主キリストは現世の命だけではなく、来世の命(永遠の生命)までも約束してくださった。主キリストはまさしく

「道であり、真理であり、命」

であった。

関連の聖書箇所を以下に記す。

- ①ヨハネ伝1章1～18節、②同8章12節、③同12章35～36節、④同章46節、⑤ヨハネ第一書1章5～7節、⑥同2章7～11節。



御国の福音を宣べつたへ (マタイ伝4章23節)

2020年10月11日

「イエスあまねくガリラヤを巡り、会堂にて教をなし、御国の福音を宣べつたへ、民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給ふ。」(4章23節)

主キリストの伝道は、「御国の福音の伝達と様々の病気の治癒」であった。当時の人々(庶民)は経済的困窮と様々の病気による苦しさに打ちひしがれて暮らしていたと思われる。その現実を前にして、主キリストは、病気の治癒によつて心身の苦しさから解き放つと共に、経済的困窮に対しては、直接的・現実的な救済ではなく、

「人が生きるのは、パンのみに由るのではなく、神の口から出る一つひとつの言葉に由る」

と、絶対的な「神信頼」の道を説かれた。荒野での40日40夜の断食を神信頼により乗り越えられた体験から、

「空の鳥を見よ、野の百合を見よ。播かず、倉に収めることもしない鳥たちを神は養いたまい、労することもせず、紡むこともしない野の百合、野の草花をも神は美しく装ってくださっている。空の鳥や野の草花よりも遙かに尊い存在である貴方達を神が放置しておかれる筈が無い。あなたがたの生存に必要なものを、神は知っておられる。だから、安心して、まず、神の国と神の義を求めるように努めなさい」

と諭された。

過去を顧みれば内面の葛藤があり、将来に対しては不安ばかりが先立ち、精神的・身体的に病んでいた自分にとつて、主キリストに出会ったこと、否、主ご自身が私を掴まえて苦しみから解き放ってくださいったことは、何にも代えられない有難いことであった。

「何事も思い煩うな。まず、神の国と神の義とを求めよ。そうすれば、すべて必要なものは、添えて与えられる。一日の苦労は、その日、一日で十分である。」

との主キリストの約束の言葉は、何と有難いことだったか！よく人は、「このご恩は一生忘れません」と言う。私にとつては、キリストが私を掴まえて解放してくださいだった「ご恩」に対して、生涯かけて、お報いしたいと願っている。今、常々思うことは、

「我、主と共に十字架に付けられたり。最早、我、生くるにあらず、キリスト(御霊のキリスト)、我が中に在りて生き給うなり」

である。コロサイ書の3章3〜4節にも、

「汝らは(この世に対しては)死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

とある。この現世において、「今・現在」を真に充実して生きることが出来れば、それで十分であると思っていた私に対して、主キリストは、願ひ以上のものを、無代価で与えてくださった。過去・現在・未来の私の全存在を十字架の尊い贖いによつて救い上げてくださった主キリストの御愛に対して、「天賦天職」に生きる「キリスト道」を貫くことによつてお応えしたいと願っている。



恵福なるかな、霊の貧しき者（マタイ伝5章3節）

2020年10月18日

「イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子たち御許にきたる。イエス口をひらき、教へて言ひたまふ『幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり』」（5章23節）

「心の貧しき者」と訳されている「心」は「霊」の意であるという。「心（霊）」が「貧しい」とは、どういう姿（相）かは、その反対の姿（相）を考えると良く分かるように思う。「反対の姿（相）」は「自分は、神様など無くても十分満足している。独立独歩、誰にも何にも頼らないで十分にやっていけている。これから、きつとそうだろう。」と言うことのできる人であろう。恐らく、来世（死後の世界）のことや、天（神）の次元・世界のことは考えていないか、考える必要がないと割り切っている人ではなからうか。参考になるのは、ルカ伝12章13節から21節である。ある富める人の所有する畑が大豊作になったので、

「どうしよう、今の蔵では貯蔵しきれない、そうだ、今の蔵を取り壊し、もっと大きい蔵を建てて、魂に言ってやるのだ、『魂よ、安心せよ、多年を過ごすに足りる多くの善い穀物を蓄えたから、何にも心配することは要らない。さあ、飲み食いして思う存分楽しむのだ！』と。」

これに対して神は、

「愚かな者よ、今夜、お前の魂は取られる（お前は死ぬ）のだ。そしたら、お前の貯えた物は誰のものとなるのか！」

と諭された。自然の中の存在者である人間は、太陽（日光）、大気（空気）、水、大地（土）の「恵み」無くしては生きて行くことができない。自然的生命体である人間がそうである上に、「霊的存在」としての人（霊の止まる存在、霊止・ひと）は、自然界の太陽の如き存在者である「神・キリスト」の恩恵なくしては生きて行けない存在なのである。この事に気付いて、神・キリストの前に首を垂れる存在、その「霊」の在り方（すがた）が、「霊の貧しい」姿であると思う。そのことに気付くには、自分が「聖なる神、義なる神」の前には出る事の出来ない「罪深い者」であるとの自覚が必要なのだと思う。

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」（ロマ書1章17節）

は、そのことを示している。主キリストの伝道の生涯は、「神の義と愛」を体現されたものであった。そのキリストが、「霊の貧しい姿」に徹しておられた。その方の中に「天国」が宿っていた。「主様！ あなたが私の全存在の根底です。全存在を支え、生かしてくださるお方です」と主にすがっている魂は、「霊の貧しい姿」であり、「天国（主キリスト、御霊のキリスト）」が宿ってくださる魂だと思う。主キリストの方から、「汝は我が愛しむ者、心に適う者！」との御声をもつて包んでくださる。そこに、平安が在る。



恵福なるかな、霊の貧しき者（マタイ5章3節）」（続）

2020年10月25日

「霊の貧しい姿（相、生き方）」とは、主イエス・キリストの「十字架の贖罪」によって、現世における生存（生き方）の土台を賜り、更に、「将来（天界）における生命、即ち、地上を去った後も天界で輝き続ける生命（永遠の生命）」に対する希望を賜って、感謝・讃美の生活を貫くことである。言い換えれば、現世での「いのち（生命）」も将来の、死後の「いのち（生命）」も、自らが創造した、あるいは、創造するものではなく、ひとえに、神・キリストの御計画とその成就によって賜ったものだ、との自覚の中で生きることである。

人間は誰でも、自らの内に「永遠の生命」を有していない。地上での生命は、「死」をもって終る。「それが人間の宿命（運命）なのだから、それを前提として、地上での生を充実したものにすれば良いのだ、それ以上を望むのは、無いものねだりであって見苦しい。」と言つてのける事の出来る人は別として、凡人（奥田もその一人）には、そのように割り切つて、平然としていることは難しい。主キリストは、我々に、そのような「悟り」の境地に達して、「死」を平然と受け入れて生きる事を求めてはおられない。主キリストは、

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」（ヨハネ11章25～26節）

と励まし、

「我、汝らを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。われ活くれば汝らも活くべければなり。」（同14章18～19節）

と約束してくださった。このように主ご自身が、我々と「一如一体」となろうとして、それを妨げる一切のものを、ご自身の十字架上で「贖い（贖罪）の死」をもって取り除き、「永遠の生命」を賜った。ガラテヤ書2章20節のパウロの告白

「我、キリストと偕に十字架に付けられたり。最早、我生くるに非ず、（みたまの）キリスト、我が内に在りて生くるなり。」

の霊的現実を祈りの中で信受・体受すること、これが信仰生活の原点である。パウロは、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、汝を罪と死の法より解放した」

と宣言し、

「我等をキリストの愛より離れしむる者は絶無である」

と、神の愛の勝利を高らかに謳っている（ロマ書8章）。主イエスは、

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには我また何をか望まん。されど、我には受くべき（血の）バプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思い逼ること如何ばかりぞや」（ルカ12章49～50節）

との願いと呻きを漏らしておられる。我々の「聖日集会」は、「主キリストの霊（みたまのキリスト）の充滿した場」で在りたい。そのためには、一人ひとり日常生活において「主キリストと偕なる生活」を送り、「御言葉（聖書）」を「日毎の糧」として喰らって生きる生き方を実践することが大切である。



我ら、既に神の子たり (ヨハネ第一書3章1～2節)

2020年11月1日

新約聖書の「福音書」を読むに当たって大切な事は、わたしたちは、主キリストの十字架に由る贖い(贖罪)と御復活による勝利とによって、「神の子」としての身分を回復していただいた「真実の神の子」であるとの自覚である。福音書、とりわけ、マタイ、マルコ、ルカの三福音書(共観福音書)においては、主イエス・キリストがどのように人々に出会い、語られ、御業をなさったか、そして、十字架上での死を遂げられた後、栄光の姿で顕現され、弟子たちに語られた後、天に昇られたかが記されている。地上におられた主イエスに出会った人々は、まだ、「真の救い」には与っていないのである。それに引き換え、わたしたちは、主イエスの十字架による「贖罪」と御復活による「死に打ち勝った勝利」とによって、「神の子」としての実(身分)を回復して頂いた「真の神の子」として、福音書を読み、御言葉を食べらって生きる者とされているのである。言い換えれば、「どうすれば救われますか?」ではなく、「既に救われて在る者、救いを体受した者は、どのように生きるのが、御心に適うことなのか?」と問いかけつつ日々を生きるのである。

ロマ書を始め、使徒たちの書簡は、この角度から記されている。使徒パウロは、「我キリストの中に、キリスト我が内に」と「御霊のキリスト」と「一如・一体」となつて生きることを貫いた。その消息を懇切に解き明かしてくれているのが、ピリピ書だと思う。

ヨハネ第一書では、

「視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称へらる。既に神の子たり、……後、いかん、未だ顕れず、主の現れたまふ時われら之に肖んことを知る。我らその真の状を見るべければなり。凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす。」(3章1～3節)

と記し、また、

「主は我らの為に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」(同16節)

と、愛の実践を呼び掛けている。これらの「奨め」は、わたしたちが日々の祈りの中で、「御霊の主キリスト」と「共なる生活」を心掛けているときに、初めて実践できるように思う。

なお、蛇足ながら、日々の「祈り」の助けとして、詩篇第103篇と第119篇を挙げておきたい。103篇は「旧約の福音」と言われている豊かな内容のもの。また、119篇は「祈りのいろは歌」と呼ばれているように、わたしたちの「祈り」の手引書として有益である。例えば、

「なんじの聖言は我を活かししがゆえに、今もなほわが艱難のときの慰めなり。」(50節)

「なんじの律法は、わが旅の家にてわが歌となれり。」(54節)

「なんじの聖言はわが足の灯火、わが路の光なり。」(105節)

「聖言うち披くれば光を放ちて、愚かなる者を慧からしむ。」(130節)

など。そして、京都キリスト召団の歌である第121篇、

「われ山にむかひて目をあぐ、わが援助は何処より来るや。わが援助は天地を
つくり給へる主より来る。」

などを。



「霊」と「肉」

2020年11月8日

これまでも、聖日の講筵において、聖書（特に新約聖書）において、「霊」という言葉と、対照的に用いられている「肉」という言葉について語って来ましたが、復習の意味も込めて、関連の言葉も含めて取り上げることになります。

1 ヨハネ伝..

- ①「神は霊なれば、拝する者も霊と眞^{まこと}とをもて拝すべきなり」(4・24)
- ②「人あらたに生れずば、神の国を見ること能はず、……入ること能はず、肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。」(3・3～6)
- ③「われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。」(6・35)

「我は天より降りし活けるパンなり。人このパンを食はば永遠に活くべし。我が与ふるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与へん」(6・51)

「まことに誠になんじらに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦^そへらすべし。夫わが肉は眞^{まこと}の食物、わが血は眞^{まこと}の飲物なり。わが肉をくらひ我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の我をつかはし、我の父によりて活くるごとく、我をくらふ者も我によりて活くべし。」(6・53～57)

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」(6・63)

2 マタイ伝..

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由ると録されたり」(4・4)

3 ロマ書..

「肉にしたがふ者は肉の事をおもひ、霊にしたがふ者は霊の事をおもふ。肉の念は死なり、霊の念は生命なり、平安なり。肉の念は神に逆ふ、それは神の律法に服はず、否したがふこと能はず、また肉に居る者は神を悦ばすこと能はざるなり。然れど神の御霊なんぢらの中に宿り給はば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。若しキリスト汝らに在さば、体は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりて生命に在らん。」(8・5～10)

なお、コリント前書15章29節以下は、「復活」のことについて書かれていますが、我々は、「血気の体」にて播かれ、「霊の体」に甦^そる（変貌すること）、「死」に勝つ勝利を、高らかに謳っています。ロマ書8章31～39節と共に、

「我等を主キリスト・イエスに在る神の愛より離れさせるものは絶無だ」と叫んでいます。



キリスト・イエスに在る生命の御霊の法

2020年11月15日

使徒パウロは、ロマ書8章において、主キリストが私達に賜わった「決定的勝利」を告白してくれています。私達は「現世(現象界)」においては、様々な制約の中で生きています。神・キリストを信じて生きる者(キリスト信徒)においても、様々な試練に見舞われます。主キリストに選ばれ、特別の使命を与えられたパウロにおいてさえ、異なることがあります。否、一般のキリスト信徒よりも遙かに勝る様々な患難・辛苦を味わっています。コリント後書11章23節〜27節に列挙されているのを見ると、なぜ、神・キリストがこのような艱難に遭遇することが無いように護り、助け給わないのか？と不思議に思うくらいです。そのような様々な艱難を体験しながらも、パウロは、コリント後書4章7節以下において「御霊なる栄光の主キリスト」を「宝」とであると告白し、

「我等この宝を土の器に有てり。これ優れて大いなる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。……我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」

と、主キリストと共なる生き方の勝利を告白しています。これは、私達にとつての大いなる慰め、励ましです。肉体を持つて生れて来た私達は、その生命が終ると土に帰ります。生物体としての私達(人間)は、聖書に言う「罪と死との法」の支配を免れることが出来ません。そのような宿命の下に生れて生きる私達に対して、「永遠界、真の生命の世界」に生きる「天国人」としての生き方を示し、

「我は道なり、真なり、生命なり。我に由らば誰にても父の御許にいたる者なし」

と、自らが私達のための「天国への道」となつてくださった主キリストは、十字架における贖い(贖罪)によつて私達に「天国人」としての「新生」を賜り、この地上ではなく、「天」に宝を積む生き方をするようにと諭してくださいました。そのような「天国人」を導いてくださる「法」が、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法」

であり、マタイ伝福音書5章〜7章の「山上の垂訓」と称されているものです。その中に、

「宝を天に積むように」

との奨めがあります。地上の財宝は盗まれて無くなることが在るけれども、天上の宝は消え失せることが無いから、と。また、パウロは愛弟子のテモテに対する奨めの中で、

「足ることを知りて敬虔を守る者は、大いなる利益を得るなり。我らは何をも携へて世に来らず、また何をも携へて世を去ること能はざればなり。ただ衣食あれば足れりとせん。」(テモテ前書6章6〜8節)

と諭しています。蛇足ながら、詩篇119篇からも、

「なんじの聖言はわが足の燈火、わが路の光なり。」(105)

「聖言うち披くれば光を放ちて、愚なる者を慧からしむ。」(130)



救いの確かさ

——「十字架」が土台、「聖霊」が確証——

2020年11月22日

ここに言う「救い」とは、「災害の危険から救われた」とか、「疫病の危険を免れた（その危険から救われた）」といった類の「現象面（現象界）」での「救い」ではなく、「霊」の次元における事態である。それは、私達人間の感覚において「どのように感じているか」とか、私達の努力・精進などの修業により獲得するもの（自分を出発点としたもの）ではなく、神・キリストの御前において、その御眼（御判断）から見て、「あなたは、神の国の民、神の国に住むにふさわしい者」と見て頂けること、その実質を備えていることを指す。

イスラエル民族は、神によって選ばれた民（選民）であり、聖意の具現としての「律法」を授かりながら、律法の目指す「神の義」に到達することが出来なかった。即ち、真の「救い」に到達することが出来なかった。その理由は、人間の側の「努力・精進」によって、神の求め給う「義」を獲得しようとしたからである。

それに対して、主イエスは、人間の側の「努力・精進による立派さの追求」ではなく、ひたすら、「神の恵み、憐れみにすがる道」を示された。ご自身の生き方としては、父なる神の御心に委ねきった「完全な従順」の姿（義）を貫き、「永遠の生命者」であり、「死」とか「神の裁き（断罪）」とは無縁であったにもかかわらず、不従順者（罪人）である我々の「罪」を負い、我々の受けるべき「神の裁き」を十字架上で受けて「贖罪」を果たしてくださった。その事実（事態）が私達の「救い」の根拠なのである。そして、この「十字架上での贖罪」という客観的事実（事態）を、「我がため」のものとして信受・体受する者は、「救い」を確かに受け取ったのである。即ち、「救いの確かさ」の根拠（土台）は、主キリストの「十字架」にあり、私達の側の「主観」とか、「救われている」との感覚（感じ方）にあるのではない。そして、この事を「確証」してくださるのが、「恵みとして賜る聖霊」である。

主イエスが架かり給うた「十字架」は、私達にとつては、「死と生」（旧き私の死と新しい命の賦与）の両方を表している。比喩的に言うならば、こちら側から見ると十字架は「旧き我」の死を表しており、その十字架を潜り抜けて、向こう側に出て見ると、そこは「新しい命」なのである。このことを、パウロは、ガラテヤ書2章20節において、

「我、キリストと偕に十字架に付けられたり。最早、われ生くるに非ず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり。」

と告白している。また、コリント後書5章17節では、

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。」

とあり、ロマ書8章2節は、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解放したればなり。」

と宣言している。また、コリント前書1章18節は、

「それ十字架の言（十字架という事実が語っている言葉）は、救はるる我らには神の能力なり。」

と、十字架の勝利を謳っている。



2020年 クリスマス集会 ご案内

2020年11月22日

今年のクリスマス集會を下記のとおり開催致します。

現在、新型コロナウイルスが収束には至っておらず、多人数での集會開催は慎重を期する必要があります。

そこで今回のクリスマス集會は、一定の予防措置と制約のもとに開催することとし、会場を広く使用するとともに、講筵を中心とした午前だけの集會と致します。参加の皆様には、体調の管理をしていただくとともに、マスクを着用し、席も空けて着席をお願いする所存です。（昼食は致しません）

1年の恵みと御護りに感謝するとともに、新しい年の新たな出発へ、祈りを共にしたいと願っています。

記

日時 12月20日（日） 10時15分～12時

会場 KKR 京都くに荘 4階比叡の間

（上京区河原町通り荒神口上る東入る）Tel. 075-222-0092

会費 無料（会場費等は、すべて京都キリスト召団にて負担いたします。）

講筵 10時15分～11時45分 奥田昌道先生

解散 12時00分

参加希望の方は、会場設営の関係上、12月12日（土）までに、電話、郵便又はメールで参加者名をお知らせください。



平安汝らに在れ！

2020年11月29日

主イエス・キリストの十字架上の死と栄光の御姿での顕現(復活)によって、私達に「贖罪」(生まれながらの「旧き我」の死)と「新生」(新しい命の賦与)の恵みを賜った主イエスは、私達に真の「平安」を与えてくださっています。福音書においては五つのパンと二つの魚をもつて男だけを数えても5000人もの群衆に食べ飽きるまでに満足を与えられた後、独り山に登って祈り込まれたイエスが、夜が明ける頃、湖上を歩み波風に翻弄されて漕ぎ悩む弟子たちに近づき、幽霊だと思つて怯える弟子たちに対して発せられた言葉が、「心安かれ、我なり、懼るな！」でした(マタイ伝14章22〜27節、マルコ伝6章45〜52節、ヨハネ伝6章16〜21節)。また、イエスの十字架上での死の後、ユダヤ人を懼れて戸を閉ざして隠れていた弟子たちに現れて彼らに掛けられた言葉も、「平安汝らに在れ！」でした。

ヨハネ伝14章から16章は、主イエスが弟子たちとの別れに際して切々と語られた言葉(「訣別遺訓」)の記録ですが、14章25節以下において次のように語っておられます。

「此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、助主すなはち我が名によりて父の遣したまふ聖霊は、汝らに萬の事を教へ、又すべて我が汝らに言ひしことを思ひ出さしむべし。われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与ふ。わが与ふるは世の与ふる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。『われ往きて汝らに来るなり』と云ひしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。」

主イエスが弟子たちに語られた言葉、

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。」(14章1節)

及び、「心安かれ、我なり、懼るな！」は、現代に生きる私達にとつても、主キリストの力強い励ましの言葉です。パウロは、ロマ書8章31節以下において、

「キリストを賜った神が我らの味方である以上は、我らは無敵であり、我等をキリストの愛より、また、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より引き離すことが出来るものは、天上下、何処にも存しない」

と神の愛の勝利を宣言しています。

ヨハネ伝14章〜16章の「訣別遺訓」の最後の言葉が、

「此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。汝ら

世に在りては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」

でありました。変転極まりない「無常」の現世に生きる私達に対して、主キリストは、助け主・聖霊の姿(相)で私達一人びとりの中に内住し、どのような場・局面においても、護り、導き、平安を与え続けてくださっています。



御霊の結ぶ実

2020年12月6日

ロマ書8章の冒頭でパウロは、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解き放したればなり」

と、主キリストの贖罪の御業により、私達が「罪と死の支配」から脱却して、「生命の御霊の法」の世界に生きる者とされたことを宣言しています。この「生命の御霊の法」に生きる者が、日常生活の歩みの中で結ぶ実が、ガラテヤ書5章22節に掲げられている「御霊の実（果）」であって、「愛・喜び（喜悦）・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制」であると述べています。他方、御霊の働きについては、「御霊の賜物」として、「智慧の言、知識の言、信仰、病を癒す賜物、力（異能）ある業、預言、霊を弁える能力、異言を言う能力、異言を解く能力」を挙げ、

「凡て此等のことは同じ一つの御霊の活動にして、御霊その心に随ひて各人に分け与へたまふなり。」

と述べています（コリント前書12章8～11節）。そして、これらの賜物以上に大切な、万人に共通に与えられる賜物として、「愛」を挙げています（同13章）。ガラテヤ書5章22節の「御霊の実」としての「愛・喜び……」とコリント前書13章の「愛の姿（相）」とは、かなりの部分で重なり合っていると言えるでしょう。

したがって、「御霊の働き」という能動面では、人それぞれで「特殊的」であっても、御霊を宿し、御霊に導かれて生きる生活面ないしその人の「品性」においては、ガラテヤ書5章22節に列举された「愛・喜び・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制」という姿（相）が自然の姿（相）だということになりましょう。社会生活、隣人との関係、更には家庭生活においても、このような姿（相）の人の在り方、存在は、人に安心感・信頼感を抱かせ、場を和ませる効果（役割）があるように思います。主キリストは、

「恵福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん」（マタイ伝5章9節）

と語られ、ご自身がその姿に徹して歩まれました。私達にとっては、神・キリストとの関係が正しくあること（十字架の贖罪愛を体受して、神・キリストによって真の平安を賜っていること）が私達の日常生活において、不可欠であると思わざるを得ません。主キリストもそれを願っておられることと思います。エペソ書3章16節以下では、

「父その栄光の富にしたがひて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を。」

と、愛の大切さを力説しています。なお、第4章も参照してください。



汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ

2020年12月13日

筵題の言葉を含む「御言葉」の全文を以下に掲げます。

『汝の隣を愛し、汝の仇を憎むべし』と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。汝ら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。』（マタイ伝福音書5章43〜48節）

冒頭に、「汝の隣を愛し、汝の仇を憎むべし」との言い伝えがあるように読めますが、旧約聖書の該当箇所（レビ記19章18節）には、その通りの事は語られていません。新共同訳聖書から引用しますと、次のように述べられています。19章17節、18節、

「心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。」

「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」

おそらく、「復讐する」ということは、その前提として、復讐する相手は「仇」であって、自分にとっては「憎い輩」、そのまま放置しておくことが出来ない者、と云うことであろう。ところが、主イエスは、そんな「仇」を愛せよ、と言われる。「隣人を愛し、仇を憎む」のは「人情」の常であって、現実に「復讐しない」だけでも立派な事だと思われるが、主イエスは、「愛せよ、その者のために祈ってやれ」

と仰せになる。これは、わたしを含めて、普通人には、とても出来ないことです。しかし、神・キリストの御前に、自分がいかに「罪深い存在」であるか（あったか）を深く知り、主の十字架の贖い（贖罪）ゆえに、主の御前に立つことが出来る者であること、そのような自分を許して頂いただけでなく、生来の自己中心の「旧き我」は主の十字架で主と偕に葬り去られ、ご復活の新しい命に生きる者とされたこと、聖霊を内に宿し、その導きを信じて歩む者とされたことに感謝して歩むならば、いつしか、「仇」のために祈るような者にして頂けるかもしれない、そんな風に思っています。

いわゆる「山上の垂訓」にせよ、主イエスの命じられていること、お望みになっていることを、自分の力で実行することが困難もしくは不可能な事が多いです。そんな時、「心配しないで良い。私（イエス）がさせて上げるから大丈夫！」との御声が響いていることに気づいて頂きたいです。例えば、「汝は世の光なり」と仰せになる時、「私に帰依、帰入（祈入）しなさい。私があるたを光にして上げるから、大丈夫だ！」との御声が発せられていることを信じて頂きたいです。主は私達に、何者も何事も、奪うことの出来ない「平安」を賜っているから、大丈夫です。ピリピ書4章4節〜7節をお贈り致します。



主キリストからの贈り物

——「見えるもの」と「見えないもの」——

2020年12月20日

私（奥田）が主イエス・キリストのことを教えて頂いたのは23歳9カ月の時、1956年7月7日の夜だった。精神的に行き詰まり、暗闇の中で呻吟していた私をキリストが掴まえてくださったのだとしか言いようがない。それ以来、紆余曲折がありながら、一筋の道を歩んで来ることが出来たのは、主キリストの力ある御手の導きのお蔭である。生身の人間や他の生き物が生存する現実世界（この世）のほかに、見えない「霊界（霊の次元）」が存在するであろうことは不思議ではないと思っていたが、それが如何なるものかは知るすべもなかったし、「今を生きること」さえも十分に出来ないのに、死後の世界の事などは関心事ではなかった。将来（未来）に関しては、不安ばかりが先立ち、「夢」や「希望」とは無縁であった。年齢を重ねる中で、サンダーシングの著作や新約聖書のキリストの言・行や使徒書簡に習熟するにつれ、現実世界（現世、見える世界）の他に、根源界（霊の次元、天界）が存在すること、福音書のイエス・キリストは根源界から現象界に降って来られた「神の現象体」であること、即ち、主イエスにおいて神がご自身を顕わしておられること、「私を見た者は、父を見たのである」との主イエスの言葉が、ごく自然な、至極当然なこととして受け取れるようになった。しかも、有難いことに、主イエスは、この地上界・現象界から、天上界・根源界（霊界）への橋渡しをしてくださった。「我は道なり、真理なり、生命なり、我に由らば誰にても父の御許にいたる者なし」と。そして、肉体の死は、肉の体を脱ぎ捨てて、霊体を賜り、天界に入ることであることを、明確に示してくださった。その消息をパウロは、テモテ後書1章9〜10節において次のように語っている。

「神は我らを救ひ聖なる召をもて召し給へり。是われらの行為に由るにあらず、神の御旨にて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜ひし恩恵に由るなり。この恩恵は今われらの救主キリスト・イエスの現れ給ふに因りて顕れたり。彼は死を滅ぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明かにし給へり。」

と。パウロは、コリント前書15章において「復活」の事を語り、

「朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦へらせられ、卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦へらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦へらせられ、血気の体にて播かれ、霊の体に甦へらせられん。血気の体ある如く、また霊の体あり。」

と述べている。これは、何も、「死」の瞬間に突然生ずる事態ではなく、主キリストを信受した時から、信徒の中で徐々に進行しているのである。そして、死をもって肉体の生命が終った時に、それまで隠されていた（表面に出なかった）生命が新しく「霊体」を賜って、主キリストの御許へ、天界へと飛翔して行くのである。コロサイ書3章3〜4節では、「汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」とある。「キリストの現れ給ふとき」ではなく、「我らが天界に導き入れられて、キリストにお会いするとき」だと申したい。

